

一般社団法人 北海道地域農業研究所

会 報

地域と農業

第 102 号

Jul.2016

Summer

- 特集Ⅰ** 「魅力ある地域を興す女性たち」
特集Ⅱ 「生乳販売に必須の農協共販」(第1回)
連載 わがマチの自慢～比布町



エーコープ くみあい 高度化成肥料

くみあい 粒状配合(BB)肥料



稔りある大地とともに

ホクレン肥料株式会社

代表取締役社長 松村 満

札幌市中央区北4条西1丁目1番地（北農ビル18F）

TEL 代表 (011)222-2444
FAX (011)232-3597

電子版でより早い情報を提供

北海協同組合通信

「解説的速報」と「重要データ」で北海道農業を強力にバックアップ！ 北海道庁、JA各連合会、関連会社、JAの動向など農政の動きから、農作物の需給状況まで、幅広く網羅します。

年間購読料 90,720円（税込）



農業をリードする
北海道の専門誌

ニューカントリー

農政や社会の動きを的確にとらえた「特集」、経営管理や技術を総合的に検証する「技術特集」で、経営発展・地域活性化に役立つ情報を提供します。活躍する農業者やグループを豊富なカラー写真で紹介。営農・生活に直結した企画も好評連載中。

平常号 926円（税込）／送料154円（税込）
新年号 1,183円（税込）／送料205円（税込）
夏増刊 1,440円（税込）／送料134円（税込）
秋増刊 3,909円（税込）／送料205円（税込）
年間購読料 18,956円（税込・増刊込）



ご購入申込・お問い合わせは下記へ

株式会社 北海道協同組合通信社 管理部

☎ 011(209)1003 FAX 011(271)5515

e-mail kanri@dairyman.co.jp

※ホームページからも雑誌・書籍の注文が可能です。
<http://www.dairyman.co.jp>

地域と農業 Vol.102

——目次——

-
- 2 **地域農研NOW** 総会を終えて～本年度の調査研究も次々にスタート
-
- 4 **観 察** ラオス この不思議な農業国
一般社団法人 北海道地域農業研究所 顧問 黒澤不二男
-
- 14 **特集Ⅰ** 平成28年度（第26回）通常総会特別講演
「魅力ある地域を興す女性たち」
—女性の持つ「バネ」と「接着剤」を地域づくりにどう活かすか—
一般社団法人 JC総研基礎研究部 主席研究員 小川 理恵
- 47 **特集Ⅱ** 生乳共販体制の役割 第1回
「生乳販売に必須の農協共販」
北海道大学大学院農学研究院 講師 清水池義治
-
- 50 **Essay** マイ フェイバリット ライフ in 美幌町
ぼちぼち農場 荒木 千夏
-
- 54 **レポート** 北海道農業の担い手育成と農地の確保・有効活用に取り組む
公益財団法人 北海道農業公社担い手本部（北海道農業担い手育成センター）
担い手本部長 加藤 和彦
-
- 58 **連 載** わがマチの自慢 No.10 比布町
一般社団法人 北海道地域農業研究所 特別研究員 三津橋真一
-
- 64 掲示板・お知らせ・DATA FILE
-

表紙：「花咲く散策路」
大坂 雅博 画



総会を終えて、本年度の調査研究も次々にスタート

□ 太田原高昭顧問（北海道大学名誉教授）が「日本農業研究所賞」を受賞



左側から太田原顧問と夫人

*写真は農業協同組合新聞様よりご提供いただきました。

五月一〇日、東京で第二七回「日本農業研究所賞」表彰式がおこなわれ、今年太田原顧問、堀江京都大学名誉教授、陽北里大学名誉教授の三氏が受賞されました。

この賞は、（公財）日本農業研究所が「農業に関する学術研究上顕著な貢献をした研究者」を表彰するもので、太田原顧問は「北海道農業の振興に果たす農協の役割に関する研究」で、受賞されました。この研究では、営農指導と販売事業による産地形成を北海道における総合農協の中心的な事業活動と位置づけ、それを通して地域農業振興に果たす総合農協の役割と機能を明確に解析しています。

受賞に伴い、太田原顧問は、「農協と北海道農業の分野で仕事をしてきたおり、地味だがベーシックな分野に光を当てて頂いたことは、同様の若い研究者の大きな励みになります。特に、農協改革については、さまざまな議論がなされ評価が定まらないところですが、そこに新しい角度から評価が加えられるきっかけになればと念願しています。」と、語っていました。

□平成二八年度第一回理事会

（四月二七日）

前年度事業報告と通常総会開催を決めました。

□平成二八年度通常総会

(五月二六日)

当日出席 三五名、書面出席 一七
四名、合計 二〇九名

総会終了後に特別講演会を実施しました(今月号の特集Iをご覧下さい)。演題は「魅力ある地域を興す女性たち」J.C総研主席研究員小川理恵先生に講師を、お願いいたしました。

□第二回・第三回理事会 (五月二六日)

第二回理事会では総会への新理事候補(案)と任期満了に伴う新監事候補(案)選任議案の提出を決め、総会後の第三回理事会では互選により常勤理事を選任しました。



□五連テーマ研究班会議 (五月二四日、三〇日)

今年度、連合会から受託した調査研究テーマについて、研究者が同席して調査の取り進めの打ち合わせを行いました。

□自主研究「北海道農業における担い手確保問題と集落機能について」研究班会議(六月二三日)

今年度実施する自主研究の研究班会議を開催しました。全道的な後継者・担い手確保の諸類型の抽出や典型事例地域調査などを交えながら、それらと集落機能など地域的・集团的機能との関連性などを検討する予定です。

□今後の予定

- ①平成二八年度事業計画説明と取組状況の報告会(七月一九日)
併せて講演会を開催します。演題は「生乳共販体制の役割」、講師は清水池先生(北大大学院農学研究院講師)です。
- ②出版助成選考委員会(七月二二日)
今年度の出版助成対象者を選出します。
- ③てん菜技術発表会(七月二〇日)
当研究所、鷹田研究部次長が発表します。



観 察
み る

ラオス この不思議な農業国

一般社団法人 北海道地域農業研究所 顧問 黒 澤 不二男

昨年十一月に、ベストセラー作家として著名な村上春樹が、紀行文集として『ラオスにいったい何があるというんですか』を刊行しました。

この奇異に感ずる書名に惹かれて買い求めてページを繰ってみました。

ところがタイトルにあるラオス記述分は二四六ページ中の二二ページで九パーセントに過ぎませんでした。

さすが当代一流の文筆家、タイトル付けは絶妙、しかしラオスに本当に関心がある読者にとって「羊頭狗肉」の感が否めません。

ラオスの項の元来のタイトルは「大いなるメコン川の畔で〜ルアン普拉バン〜」でした。このタイトルでは普通の読者は手

にとってみる気は起こらなかったかもしれない。私は見事に釣られた一匹の魚だったんですね。

しかし、小文でしたがラオスという国の特質を見事に描きだしており、その点では不満はありませんでした。

ちなみに一月ほど前の北海道新聞の近刊書紹介で『ラオス全土の旅』という本が紹介されており、そのキャッチコピーに、イギリス国民へのアンケートの中で、世界で一番行ってみたい国のトップはラオスだったという記述がありました。

私たちの周囲でも、アジア諸国を訪れた方々は、隣国の韓国、台湾、中国、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピンなど多数おられると思いますが、ラオスを訪れたことのある人は少なく、隣国のタイとは対照的です。

私も知人から誘いを受けて今回訪れるまではほとんど意識することはありませんでした。ラオスと聴いて反射的に思い浮かべたのは大河メコンと「パテトラオ」（独立戦争時の共産系ゲリラ）という言葉だけで、汗顔ものでした。

このたび知人から、ある国際協力プロジェクトの関連でラオスに行ってみませんかという誘いがあり、物見高さもあって喜んで同意、この一月中旬に乾期のラオスを訪れることができました。

なお、プロジェクトは現在も進行中であり、全容については機会を改めて紹介することにして、本稿ではラオスという馴染みの薄い国のプロフィールを紹介してみたいと思います。

ラオスのあらまし

通称ラオスは、正式には「ラオス人民民主共和国」。東南アジアのインドシナ半島に位置する共和制国家で、人口六三二万人、半島唯一の内陸国で面積は日本の約六三%、国土の約七〇%が高原や山岳地帯です。

北は中国、東はベトナム、南はカンボジア、タイ、西はミャンマーと国境を接しています。首都は、今回わたしたちが訪れたヴィエンチャンです。

ラオスの歴史と国家体制

ラオスの歴史を、一八世紀以降から概観してみますと、当時は三つの王国に分裂、それぞれタイやカンボジアの影響下に置かれていました。

一九世紀半ばにフランス人がインドシナ半島に進出し始めた頃、ラオスの三国はタイの支配下にありましたが、ラオスの王族はフランスの力を借りて隣国に対抗しようとし、フランスの保護国となり仏領インドシナ連邦に編入されました。

第二次世界大戦中は日本が進出、その協力で独立宣言したものの、大戦終結後フランスが再び仏領インドシナ連邦を復活させようとしたことで戦乱が勃発。結局、一九五三年に独立したのですが、その後支配権をめぐって、右派、中立派、左派（パテート・ラーオ）によるラオス内戦が長期にわたり続きました。

一九七三年、アメリカがベトナムから撤退、一九七四年三派連合によるラオス民族連合政府が成立。一九七五年南ベトナムのサイゴンが陥落すると、連合政府が王政の廃止を宣言、現在の「ラオス人民民主共和国」が誕生、一九九一年には憲法を制定。

以来、ラオス人民革命党の一党独裁体制が維持されており、一九九七年には、東南アジア諸国連合（ASEAN）に加盟し

近代国家の仲間入りを果たしました。

敬虔な仏教国でありながら、社会主義国型の一党独裁制（一党制）が敷かれており、この両者が矛盾なく並立しているのが、わたしたちにはちよっと奇異に感じられるところです。

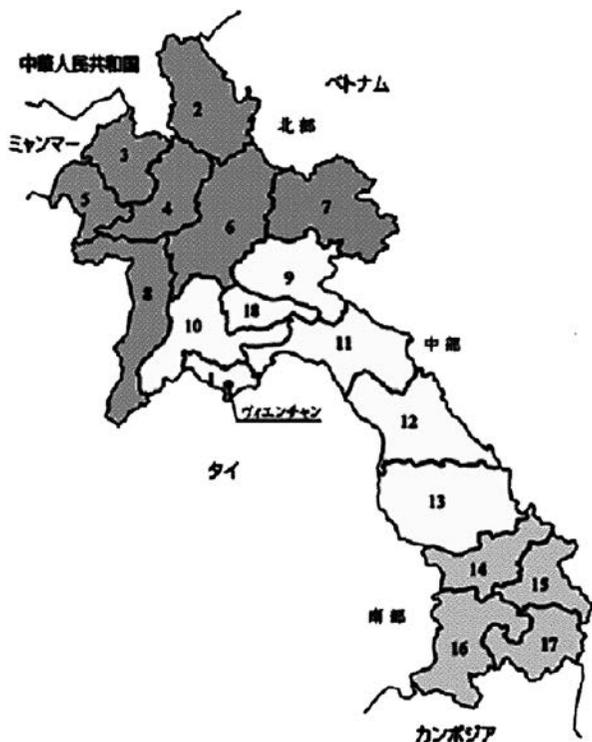
行政地域区分

ラオスの首都はヴィエンチャンで、主要都市にルアンパバーン、サウンナケート、パークセー（パクセー）などがあります。行政区分（地方）は首都のヴィエンチャン市を含む広域ヴィエンチャン行政区と一七の県から構成されており、県には郡、さらに村があります。

地方には議会がなく、県知事は国家主席が、郡長は首相が、それぞれを任命するという中央集権的行政制度をとっているそうです。

ラオスの国土・気候とメコン川

ラオスは、海と接しない内陸国で、国土の多くは山岳部、国土面積の六一％は森林ですが、この森林地帯でも多くの人々が生活しています。



	県名	県庁所在地
1	ヴィエンチャン特別市	
2	ボンサリー	ボンサリー
3	ルアンナムター	ルアンナムター
4	ウドムサイ	サイ
5	ボケオ	フエイサーイ
6	ルアンパバーン	ルアンパバーン
7	フアバン	サムヌア
8	サイニャブリー	サイニャブリー
9	シエンクアン	ベーク
10	ヴィエンチャン	ビエンカム
11	ポリカムサイ	バクサン
12	カムアン	タケーク
13	サバナケート	カンタブリー
14	サラワン	サラワン
15	セコーン	ラマム（セコーン）
16	チャンバサク	バクセー
17	アッタプー	サマッキーサイ（アッタプー）
18	サイソンブーン特別区	サイソンブーン

インドシナ半島を流れるメコン川は、チベット高原の源流から南シナに注ぐ総延長四、三五〇kmの国際河川で、ラオスを貫いて流れており、ミャンマーとタイとの国境を画しています。

隣国タイとの国境線の三分の二はメコン川です。

また、国境として隔てるだけでなく、人や物が行き来する水運にも利用されています。

メコン川は、雨季に洪水となる後背地・氾濫原の底土からの栄養塩類を受けられることから、

藻類やプランクトンなどが多く、草食性・プランクトン食性の魚類が豊富に生息、漁場として重要な役割をになっています。ヴィエンチャン市内のマーケットでも多様な魚類が店頭を賑わしていました。

メコン川の乾季と雨季の水位の差は、ヴィエンチャンで一〇mを超え、乾季のおわりの四月ごろには、小さな支流では水がほとんどなくなってしまう、メコン川本流でも驚くほど水位が下がります。それが五月の雨季とともに水量が



乾期・湯水期のメコン川



農村部の支流・低湿地

増し、八〜九月には自然堤防を越えるほどの水量で、低地を水で覆うほどになるそうです。

ラオスの気候はモンスーンの影響で明瞭な雨季と乾季に分かれ、大まかに言って五月から十一月にかけては雨季、乾季が十二月から翌春の四月まで続きますが、わたしたちが訪れた一月下旬は乾期で、もっとも過ごしやすいシーズンだとのことでした。

ラオスの産業と経済

基幹産業はもちろん農業ですが、東南アジアの最貧国という経済から脱却するために、社会主義経済から資本主義経済体制への転換に遅ればせながら取り組んでいます。

近年では、観光のほか、国土の約半分を占める森林から得られる木材、ナムグム・ダムを始めとする水力発電によって隣国タイへの売電や対外援助などが主な外貨源となっています。なお基幹通貨はキープですが、隣国タイの通貨バーツが自国通貨なみに使用されています。

外国企業の投資促進のため、国内に一〇個所の「経済特別区」が設けられ、中国やタイなどの賃金水準の上昇に伴って安い労働力を求める外国企業の注目を集めており、海外からの援助・投資により、七〇％の経済成長を実現しているようです。

とりわけ、隣の大国である中国からは、官民挙げて企業や労働者がラオスに流入。ビエンチャンに中国系の店舗が集まるショッピングモール、中国が建設した公園が完成していたり、ダム工事などこれまで主に日本が行ってきたインフラ整備関連事業にも進出が目立っています。経済発展と密接な関連をもつロジステックスに関しては、国内に鉄道がなく、基幹道路の整

備が遅れていることなどが大きな隘路となっています。

原料の輸入や製品の輸出にはコストがかかり、安価な労働力を生かして工場を誘致するという東南アジア流の手法も難しく、近代的な設備を備えた大きな工場としては、ビールや清涼飲料水などを生産する国営のメーカー「ビア・ラオ」が目立つ程度。米を原料とする焼酎ラオ・ラーオも、生産は家内制手工業レベル、伝統工芸品として織物も多くは農家の女性たちの副業として手作業により作られているようです。そのためか、わたしたちが訪れた市場に並ぶ工業製品の大半はタイ製か中国製でした。

ラオスの農業

国民がまんべんなく分散して暮らすラオスでは、労働人口の約八割が農業に従事、稲作を基盤とする農業を営んでいます。まず、自給米を確保し余剰分を販売、その現金収入で日用品を購入するというのが農村部の基本パターンとなっています。主食はもち米で、自給農業を基盤とした分散型社会と位置づけられるでしょう。

GDPは低いのですが、恵まれた気候、水利から食料は豊富で、飢餓に陥ったり、物乞いが増えるといった状況にはありませんので、「貧しい国の豊かさ」といわれるゆえんとなっています。

ます。

市内中心部のモーターバイクの大群も驚異的でしたが、いまだたくラクシオンを鳴らしたり、怒鳴り合うというような光景には遭わなかったし、わたしたちの接したラオスの人々の性格は温和で、皆ゆったりとした日々を送っているように感じました。

気のせいか犬や猫、農村部での牛、水牛、家禽類までノンビリ、マッタリと飼われていて、我が日本の同類からみればうらやましい限りだと強く印象に残りました。

稲作、野菜、果実類以外では、現金収入を得やすいパラゴムノキの栽培をする地域が現れたり、高原地帯では良質なコーヒーの栽培が行われ、ラオス最大の輸出農作物となっています。また、近年まで農薬や肥料の使用がされてこなかったことから、無農薬栽培の作物を育てて輸出する動きも一部にはできています。

ラオスの稲作の特色

ラオスのコメは、栽培システムからおおまかに、(1)天水水稻作、(2)灌漑水稻作、(3)陸稲作—の三つに分けられています。その定義は表のとおりとなっています。

最近のラオスのコメの収穫面積は八五〇九五万ha、籾生産量は三〇〇三四〇万トンで、雨期天水水稻作が全収穫面積の約七〇%を占め、生産量では、雨期天水水稻が約七六%、乾期灌漑水稻が一七%、陸稲が七%という構成となっているとのことです。

ラオスのコメはモチとウルチが生産されており、ラオス国民の主食はモチであるため国内で生産されている八〇〜八五%のコメがモチとなっています。一方、少数民族のモンとヤオ族、都市圏の一部住民と外国人が主としてウルチを食しているとのこと。

灌漑水稻作では年二回、雨期と乾期に作付けします。水源と灌漑施設が整備されている地域では、灌漑水利組合によって、個別の圃場へ導水し湛水しているようです。雨期は天水水稻作とほぼ同じ作業暦で、乾期作は雨期の収穫直後から十二月にかけて育苗し、一月に移植し、乾期の終わりから雨

ラオスの稲作の栽培システムによる定義

栽培システム	定義
天水水稻作	畦で区切られた圃場で稲が栽培され、圃場は栽培期間中に降雨を利用して湛水状態になる。
灌漑水稻作	畦で区切られた圃場で稲が栽培され、圃場は栽培期間中に灌漑用水を利用して湛水状態になる。
陸稲作	圃場は畦がなく、降雨を利用するが湛水できない。稲は主に斜面上で栽培され焼畑が主流である。



標準的な機械装備



本田一部利用の育苗



ジャンボタニシの卵塊 (被害大)



家族主体の田植え風景

期の始まりの 四〜五月に収穫となるのです。
今回、わたしたちが訪れたのは、首都ヴィエンチャンから約三〇kmの純農村地域で、かつて日本の経済援助で基盤整備(約三、〇〇〇ha)された稲作地域です。

灌漑施設等は老朽化、ほ場区画も当初区画から小区画に細分化され、一戸当たりでは平均一・〇ha程度の零細な稲作を営んでいます。灌漑用水はメコンの支流からポンプアップされたものを利用して

います。
土地制度は、ラオスというか社会主義国家によくみられるように、土地は国有で、利用権を分与された地主(公務員が多いようですが)から、耕作農民が借地利用するシステムをとっています。

種籾は主に、モチの改良種PNGやTDKという品種が主体で、購入または自家採種。

ウルチはタイ等の基幹品種のジャスミンライスだそう

です。
本田の一面の五〜一〇%の面積で三〇日苗を育苗、移植の二〜四週間前にプラウ耕で荒起こし、通水後さらに碎土・代掻きをします。これを、①



市場にならぶモチ米



訪れたある農家の家族



稲作農家バサートさん

耕耘機・②水牛と鋤・③賃耕という三パターンのどれかで耕作します。この地域では①と③が主体となっています。③が主体となってきたのは、個別農家でも五〜八・五馬力の耕耘機をローンで購入できるようになってきたからだと言いました。

移植は機械移植がまだ少数で、手植えが主体で、化成肥料と尿素などを組み合わせてhaあたり全窒素で六〇〜八〇kg程度施用していますが、防除では農薬等の薬剤はあまり使っていないということです。除草は人力による除草作業、収穫は鎌を使って

の手刈りが主体。①親類縁者による自家完結、あるいは②村落内で労働力を提供しあって共同で収穫、もうひとつは③雇用労働主体の三パターンで、家族構成や集落内の人間関係等の状況によって決まり、仕事量はおおむねhaあたり三〇〜三五人日程度だそうです。

収穫したらそのまま圃場に置き天日乾燥し、脱穀は動力脱穀機の自家利用が主体で、粃の状態を高床式の小屋に貯蔵する場合が多いようです。

自家消費分を除き、余剰米は販売するが、商業的精米業者に直接もみを持ち込むか、



市街地にある精米業者の豪邸



精米業者の工場

精米業者の代理である集荷業者が農家の粃を集荷するシステムが主流で、精米料として碎米、米糠は業者取り分に。玄米価格は変動しますが、モチで市場最終販売価格の四〇〜五〇%が農家手取り価格の水準となつています。稲作農家経済を補つたため、野菜等の現金作物の栽培や、若年家族員の市



副業で行う雑貨店舗

街部への通勤兼業、主婦などは農園に小売り店舗を出すなどの副業も盛んなようです。

基本である稲作の精米業者対農家間の収益配分率の適正化が大きな課題となつていふことから、これに影響するファクターとして精米歩留まり（品種、貯蔵水分、精米機能力等による）が挙げられますが、これに関わつて我が国の技術協力や支援の方向等も検討課題となつていふます。

暮らしのあれこれ

ヴィエンチャン市街では、公共交通機関網（電車、地下鉄など）がないことから、もっぱらバス、自動車、モーターバイクが利用されており、通勤、通学はバイク頼りで、そのピーク時は壮観で、バイク車体を改造した五、六人の乗り合いタクシー（Tuk-Tuk）も重要な交通手段となつていふました。中国資本や韓国資本のショッピングモールも出店していふようですが、食料や衣類、日用品の買物物は大型の市場が開設されており、山の人で活況を呈しており、そのエネルギーには圧倒されまふした。路傍での売店、飲食店のたぐいも多ふ、暮らし易さ、物価水準はわたしたちの眼からみても十分満足できる水準だと感じまふました。



ホテル前の露天居酒屋の活況



市場の新鮮・豊富な青果物

ただし、工業製品等はほとんど輸入品、高額な買い物等は隣国タイでというケースが多いとのことでした。

乾期というせいもあって、気温は二五℃〜三〇℃で比較的過ごし易く、市街には色とりどりの花が咲き乱れ、快適な滞在を楽しむことができました。ちなみにホテルは一泊日本円三、〇〇〇円程度の中級クラスでした。食事はメコン川を眺望できるレストランで朝食、夕食はホテル前道路にほぼ常設されている露天飲食店で、ラオスビールを傾けながら豊富な食材でのラオス料理（モチ米の

おこわ、米粉の麺類、メコンでとれたテラピアやナマズ類の唐揚げ、多種のフルーツ、パクチーなどちょっと癖のある香草などのトッピング）を楽しむことができました。

ラオス料理の特徴は辛いものはより辛く、甘いものはこってりと甘いので、日本人には苦手な方もいるかもしれません。

むすび

短期間でヴィエンチャン近郊の農村を駆け歩いてきましたが、社会経済や農業の発展段階からすると、ラオスは、いわゆる後発・発展途上国に位置づけられますが、我が国と対比してみると、そこに暮らす人々の満足度、充足感は決して低くはなく、時間はメコンのようにゆったりと流れているように感じました。また今後の伸びしろという可能性は豊かで、何とも不思議な魅力秘めている国で再度訪れたいという気持ちを起こさせる場所でした。メコン川のように、源流部では荒々しく、中流部ではゆったりと、下流部では茫洋と広がる様相のようなふところの広さに打たれました。

また、本稿では、わたしたちのプロジェクトの詳細を紹介することはできませんでしたが、機会があれば紹介をさせていただきます。と思っています。

〈了〉

平成28年度(第26回)通常総会 特別講演

日時…平成28年5月26日
場所…札幌市 全日空ホテル

挨拶

一般社団法人 北海道地域農業研究所
理事長 内田 和幸



平成二八年度の特別講演会の開催にあたりご挨拶を申し上げます。お集まりの皆様には時節柄何かとお忙しい中、また総会に引き続きのご出席いただき心より厚く御礼を申し上げます。今年は例年よりも早く桜の開花が進み、春作業はほぼ順調に進んでいるところであります。一部には強風の被害も見られますが、今後の好天と出来秋の豊作に期待をしております。先程、当研究所の第二六回通常総会が終了しました。昨年度は一六件の調査研究

事業に取り組みました。機関紙「地域と農業」の発行は、通巻で一〇〇号となりました。研修会の開催や講師派遣により、タイムリーな情報発信にも努めてきたところであります。今後とも農業情勢に的確に対応した調査研究を進めて、会員ならびに関係機関の負託に応える事業を推進してまいりますので、引き続きご指導とご支援の程をお願いするところであります。

さて、本日の特別講演会には講師として、JIC総研の小川主席研究員をお招きしました。小川主席研究員のご経歴は、お手元の資料のとおりであります。男女問わず有能な社員の能力や意欲を生かせない企業は、成長できないと言われております。また、男女平等や雇用機会均等は企業が社会から信頼される指標のひとつであり、企業が利益を生む重要な施策とも言われております。特に農業には六次産業化や農村生活問題など、女性ならではの視点が必要とされ、女性のパワーを発揮できる分野が多いと言われております。国も女性活躍推進法を制定いたしました。その一環で農業委員や農協役員への女性の登用を一層

推進することとしております。本日は小川主席研究員から、女性が活躍する農業現場や農村社会、女性が活躍するJAの実態などについて貴重なお話がいただけるものと期待をしております。この講演のため、東京からご来道いただいた小川主席研究員に厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。本日の講演会が参加をいただいた皆様にも実りあるものとなることを期待申し上げます、開会のご挨拶とさせていただきます。



次に、本日の講師をご紹介します。JC総研の小川理恵主席研究員です。小川様は、地域づくりや農村福祉、あるいは農村における特産品づくり等々に関する丁寧な調査に基づいて、多くの論文や著書をお出しになっています。女性に視点を絞った調査研究活動では、日本の第一人者ではないかと思えます。二〇一四年には「魅力ある地域を興す女性たち」という本も出されています。本日は、本の名前と同じ題名でご講演をいただきます。

女性の活躍の場をどう作るかという問題は、私たちに課せられた、社会に課せられた、非常に大事なテーマであると思えます。小川さんからは示唆に富んだお話をいただけると期待しております。それでは、よろしくお願いいたします。



講演

「魅力ある地域を興す女性たち」

―女性の持つ「バネ」と「接着剤」を地域づくりにどう活かすか

一般社団法人 J C 総研
基礎研究部 主席研究員 小川 理 恵

皆さん、こんにちは。J C 総研の小川理恵と申します。本日は一般社団法人 北海道地域農業研究所の特別講演会にお招きいただき、誠にありがとうございます。先ほど飯澤所長からご紹介いただいた「魅力ある地域を興す女性たち」は、全国の書店で発売中です。お時間があればぜひ手にとっていただけたらありがたいと思います。私がおります J C 総研は、農業協同組合や農業、地域づくりを調査研究するシンクタンク、調査機関です。私は機関誌「J C 総研レポート」の編集長をしています。私は一号の創刊時から編集に携わっており、現在三八号を数えるまでになりました。さらに、地域づくりと女性活動の研究をしています。全国各地の女性活動を回って、それをまとめたの

がこの本です。今日は、この本の中からお話したいと思います。まず、女性が元気なところは地域が元気と言われます。女性の活動は一体どのように始まって、どのように発展して、どのように地域を元気にしているのか。二つの事例を紹介してお話します。今日、会場には女性の皆さんがいっぱいいらっしゃいますが、地域で活動する女性の方がどうすれば次の段階に進めるのか、ヒントを得ていただければ嬉しいと思います。二つ目に、J A 組織の中で女性の力はどういう意味を持っているのか、そして、J A や地方自治体でどのように女性の活動を応援すれば魅力ある地域が出来るのかを考えてみたいと思います。最後に、女性力、女性力と言われるけれど、そもそもなぜ今女性力が必

小川 理恵 (おがわ りえ) 氏



- ◆一般社団法人 J C総研 基礎研究部 主席研究員
- ◆研究分野は「地域づくりと女性活動」
- ◆総務課長、企画調整室長を経て研究職に職種転換、現在に至る
- ◆J C総研の機関誌『J C総研レポート』編集総括
- ◆主な著書
 - 『魅力ある地域を興す女性たち』（農文協、2014年）
- ◆論考
 - 『躍動するJA女性部が核となり地域活性化をプロデュース～JA静岡岡市女性部美和支部 アグリロード美和～』『JA農業協同組合経営実務（2016年1月号）』全国共同出版、2016年
 - 『全国農業新聞』（全国農業会議所）コラム「未来への階段」連載中（2016年4月～）

要なのかに思いを馳せてみます。このような流れでお話をさせていただけます。二時間弱の長丁場になりますが、どうぞよろしくお願ひします。

一．注目される女性力

今、女性力が注目されています。この四月には「女性活躍推進法」が施行されました。二〇一四年に、安倍首相が「すべての女性が輝く社会づくり本部」を立ち上げてから、女性力、女性力と言われています。なぜ今女

性力が必要なのか。理由としてよく言われるのが次の三つです。一つは、少子高齢化で減少する労働力を補填するためです。少子高齢化で労働人口がどんどん減っている。働く人がいないので、今まで家庭にいた女性たちががんばって働いてもらいたい。こういう考え方ですね。これは少し気をつけないといけません。例えば機械化などが進んで、労働力がいっぱい無くて生産性が上がってきた時、また女性はいらなくなる可能性を秘めている。そんなことが危惧されます。

二つ目の理由は、人材多様性（ダイバーシティと言われます）の為に男性だけでなく女性も登用しようということですが、これにも影に隠れた問題があります。人材多様性というと、すぐに性別のみに注目しがちです。しかし、本当の人材多様性とは性別だけでなく、新たな価値観を企業や団体の経営に活かすことで新たな道を歩みだすことで、それが、本当の意味での人材多様性です。にもかかわらず、人材多様性＝性別と狭義に捉われるという問題が隠れています。

三つめは、ガバナンス強化のためです。ガバナンスとは企業や組織の管理体制です。ガバナンス強化のために、男女平等にしていかなければならないと言われます。

だいたいこの三つが、女性が必要な理由と言われています。これも正しいですが、この三つだけだと、その背後に女性の力を活用してやるよという思想が見え隠れします。女性の側からは、そんな気がしてしまいます。「活用」と言われると「ん？

何か欠けているな」と思うのです。よくテレビに出ていて、皆さんご存知の同志社大学教授の浜矩子さんは、ある講演でこうおっしゃいました。「女性が輝くを英語で何と言いますか。文法的なことは別にして Women shine だとしますね。輝くは shine です。Shine という言葉をローマ字読みにしたら何て読みますか。そう、死ねです。女性死ね、そういうふうになりますよ」と。死ねって随分おもしろいことおっしゃるなと思つたのです。これは、今の様々な施策を皮肉つたわけではなくて、男性主導で単に女性を働かせようということではなく、女性自らが本当に自分で輝きたいと思つて自ら踏み出しましょうという意味で、先生はおっしゃいました。

私は、今なぜ女性力が必要なのか、先ほど挙げた三つの理由だけではない、違う理由があると思つています。その理由について、今日のお話の最後にもう一回考えてみたいと思ひます。

さて、今なぜ女性力が必要なのかを考える時に欠かせないのが日本人の価値観の変化です。価値観は、3・11の大震災の時に大きく変わったと言われています。それは、様々な調査やアンケート結果に出てきており、歳を重ねた人ばかりではなく、若い人たちの間にも価値観の変化があつたと言われています。

では、どのように変わったのか。経済一辺倒の考え方から心の豊かさへシフトしたと言われています。「金から人へ」なんてよく言います。実はみんな、3・11が起る前から気がついていたのです。「お金、お金って言つけれど、本当にそれで幸

せたらどうか」。震災前は、声を大にしてそれを言つのが憚られるということがあつたと思ひます。

3・11の大震災の時に東北の皆さんが自分のことはさて置き地域の中で助け合う姿を見て、みんなショックを受けたのです。私もショックを受けました。「自分だったら大丈夫かな、こんなに地域とのつながりがなくて…。もしかしたら私が埋もれても誰も助けてくれないかも…」と、真剣に思つたのです。お金では買えないものがある。心の豊かさが本当は大切なんじゃないかと考えるきっかけになつたのが、3・11の大震災だつたと思ひます。そのような中で何がクローズアップされるようになったか。それは、自分が住む地域です。地域・家族・仲間といった、絆という言葉に代表される様なものがクローズアップされるようになったのです。農山村回帰と言いますけれど、若者が都会から地方に移り住む流れも出来つつあります。

クローズアップされた地域、みなさんが暮らす地域に目を向けてみますと、さあ、何が見えるでしょうか。そこには彩り豊かな女性活動が多数存在しています。多くの女性たちが活躍しているのが見て取れます。女性活動という言葉を使いましたが、女性が主体になつている J A 女性部の活動や女性起業家による事業を一体化して女性活動と呼ばせていただきます。3・11の時にも J A 女性部や生協の女性グループの皆さんが、行政では手が届かない細かいニーズにいち早く手を差し伸べて、被災者の皆さんの心の拠り所になつたという話は枚挙にいとまが

ないと思います。今は熊本でも同じようなことが起こっているのではないかと思います。女性の人たちは地道に、地道に活動している。

しかし、女性活動が社会的に十分認知されているとは言い難い状況にあると思います。女性活動がいつぱいあって、地域の中心になっていたりするけれど、それをちゃんと評価出来ていない。これは、なぜでしょうか。一つは経済性に乏しいと言われてしまうことです。儲けてないよと言われてしまう。直売所などをやっても「ここ儲かっていないよね」と数字だけで判断されてしまうことが一つめです。そしてもう一つは、「女性たちがやりがいや楽しみを目的にやっているの、それ以上の評価はしなくてもいいんじゃないの?」と思われるでしょう。この二つが、女性活動が社会的に十分認知されているとは言い難い状況を作っているのではないかと思います。私は、全国各地の女性活動を見るうちに、これらは狭くて偏った捉え方じゃないかと思いついたのです。

女性活動って一体なあに? それに対して私はこう思ったのです。女性活動は地域のバネと接着剤じゃないか? 女性が地域のバネと接着剤となって、はじめは小さなつむじ風のような女性活動が、大きなトルネード、竜巻に成長して、地域全体を巻き込みながら魅力ある地域を興しているのです。

では、女性たちはどうやってバネや接着剤となり地域興しをしているのでしょうか。私が見てきた事例の中から代表的なも

のを二つ紹介してバネと接着剤の説明をしたいと思います。

二. 女性が興す「魅力ある地域」①

事例の一つめです。男女共同参画ならぬ女男共同参画で地域の力を生み出している高知県のJAコスモスの事例を紹介します。とても有名な事例ですから、もしかしたら皆さんの中には直接、お話を聞いたことがありますよ、場合によっては行ったことがありますよという方もいらっしゃるかもしれません。そういう場合はおさらすのもりで聞いてください。JAコスモスの職員に中村都子さんという方がいます。今は福祉の担当をされていますが、元生活指導員の方です。中村さんは、農家のお母ちゃんたちが農業を頑張っている、家事を頑張っている、お嫁さんとしてもすごくやっている、なのに中々自分の自由になるお金を持っていない。何とか自由になるお金を持たせたいと思ったのです。

一方、農村の女性たち、JA女性部の皆さんはこう思っていました。自給運動で、自分の畑で農薬を使わないと面白い野菜を育てました。農家ですから、プロですからどんどん育ちます。自分の家だけでは食べきれない。周りも作っていますからお裾分けで交換したところで高が知れている。せっかくできた良い物を無駄にしない方法はないか。農家の良心をどなたかに届けたい。この二つの思いがコラボレーションしたのです。よ

し、直売所を作って畑で傷んでしまう安全安心な野菜を換金し
ましよう。そうすれば女性部の女性たちの思いと、中村都子さ
んの思いの両方が叶います。そこで直売所を作りましようとな
ったのです。JA女性部のメンバーと中村都子さんは組合長
に直談判しました。けれども組合長からは「絶対だめ」という
答えが返ってきたのです。それは何故か。これは昭和六一年の
ことです。今でこそ農産物直売所はあつちでもこつちでも開花
していて、とてもいい成果を上げていると思いますが、昭和六
一年ではいくつかのJAで直売所に取り組むものの、中々成果
が上がらずに撤退してしまう、そういう時代でした。組合長は
別に意地悪で言ったのではないのです。リスクを負えないから
難しいよとおっしゃったのですね。けれども、女性たちは諦め
ませんでした。毎日毎日、日替わり交代で組合長室に行つてお
願いしました。その結果「そこまで言うのだったら、JAはお
金を出せないが、JAの敷地内に建てることはいよいよ。敷地は
貸してあげるよ」と組合長から了解を得ることができました。
そして全部で八三人の女性が集まり、一人一、〇〇〇円ずつ出
資した八万三〇〇〇円の出資金と自分たちで借金をして建てた
農産物直売所が、この写真の「はちきんの店」です。建物を建
てるためのお金を女性たちが自ら借金をして建てたわけです。
お店の名前の「はちきん」といっつのは男性が四人でかかつても
かなわない、向こう見ずで勝気な高知県の女性のこと。八つの
金と書いて「はちきん」と言つのです。自分たちは勝気な「は

ちきん」だから、それをそのまま店の名前にしようよといっつ
が理由の一つですが、もうひとつ大切な理由がありました。農
産物をお金ではなくて、安心安全や育むという観点から捉える
ことが出来るのは自分たち女性だ。このお店は自分たち女性が
やらなければ意味がないから、お店の名前は「はちきんの店」
となったのです。つまり、女性目線で農家の良心を売るといっ
つ決意がお店の名前に現れているのです。ちなみに、高知県の女
性が「はちきん」なら高知県の男性は何といつか。「いごっそ
う」と言つのです。ちなみに日本三大頑固はご存知ですか？
一つが高知県の「いごっそ
う」です。二つめは青森県
の「津軽じょっぱり」、三
つめが熊本の「肥後もっこ
す」。この三つが日本三大
頑固と言つそつです。
このようにして、昭和六
一年に「はちきんの店」が
オープンしたわけです。け
れども、オープンしただけ
で終わらないのです。お店
を作り、畑にあるもの並べ
ただけでは、はじめはいい
けれど、売り上げはどんど



ん落ちてしまいます。だったらどうすればもっと売れていくか、女性たちみんなで考えました。そして、「はちきんの店」の開店の翌年に「ここ掘れワンワン塾」という塾を自分たちで開講したのです。何をやったかと言いますと、栽培技術向上の為に勉強や農業の基本的な知識、そして売れるラッピング方法なども学びました。今でこそ顔の見える農産物といって、直売所に行く自分の似顔絵やレシビが入っているのが流行っています。これは昭和六一年の話です。その頃から売れるラッピング方法を、自分たちで学んでいる。作り手としての良心に恥じない農産物を提供するための学習活動を積極的に幅広く行ったのです。その甲斐があつて「はちきんの店」の売り上げは、初めは三、〇〇〇万円だったのですが翌年には七、〇〇〇万円と倍増以上になり、その後も順調に売り上げを伸ばしたということです。現在、「はちきんの店」の出荷者は約四〇〇人に増えています。一人平均年間五〇万円くらい稼いでいるそうです。年間では二億三、〇〇〇万円の売り上げがあります。農産物直売所の売り上げが二億三、〇〇〇万円というと少ないと思われる方もいらっしやるかもしれませんが、一〇億円くらいあるというのが農産物直売所ですが、「はちきんの店」はプレハブづくりの簡素な建物です。周りに人もいない。その中でこれだけの売り上げを上げているのはすごいと、私は現場に伺って思ったわけです。高知県内には支店が五店舗あり、東京や大阪にも出荷しています。女性たちの小さな活動から始まった「はちきんの

店」ですが、今では地域のキーステーションに育っています。ここで写真を紹介します。朝七時ぐらいの「はちきんの店」の出荷風景です。この写真で気がつくことはありませんか？女性の活動のはずなのに、写っている人は皆、男性じゃないですか。今では、一人暮らしの男性や、お年寄り、「はちきんの店」の役員会で承認を受けると男性も出荷できます。このお店は地域に埋もれた男性発掘の役割も担っているわけです。取材に行った時に九〇歳のおじいちゃんがお花を出荷されています。「わー、おじいちゃんお元気ですね」と言ったら、そのお花を持って私のところにおもむろに近づいてきて「嫁さんになんないかい？」とプロポーズされました。「すみません、夫がいるものですから」とお断りしましたが、九〇歳のおじいちゃんがプロポーズするくらいに元気になってしまふのが「はちきんの店」です。さらに、出荷用のトラックを二台、自分たちの



お金で買いました。建物の借金はすでに完済したそうです。

普通はこれで話は終わりです。直売所ができました、勉強してもっと売るようになりまして、完済しました、すごいよね、で終わるのですが、ここで終わらないのがこの活動のすごいところですよ。「はちきんの店」が波に乗り、お小遣いやそれ以上のお金が女性たちの手に入るようになりました。しかし、今まで自由になるお金を持ったことがないから、そのお金をどう使ったらいいかわからなかったのです。お子さんの塾にお金を使ったり、お父ちゃんのパンツを買ったり、それも素晴らしいことだけれど、自分で稼いだお金で自分の生活を潤して初めて経済的自立ではないか。でも、その使い方がわからない。だったら使い方の勉強をしようと考えたのです。そこで始めたのが、稼いだお金をうまく使って生活を楽しむための学びの場「ちいばっばスクール」です。「ちいばっばスクール」という名前がまた面白いですよ。女性たちは賑やかだからという意味もありますが、もう一つ意味があります。

当時「ビー・バップ・ハイスクール」という映画がありました。不良高校生たちが活躍するお話です。「ビー・バップ・ハイスクール」その「ビー・バップ」と「ちいばっば」をかけたのです。彼らの様にぶっ飛んだお母ちゃんになりたい。その思いがこの名前に現れているそうです。

何をやったかといいますと、テーブルマナーやウォーキング、料理教室や絵手紙です。先ほどの「ここ掘れワンワン塾」とは

違って、今度は生活を楽しむための楽しい勉強をしました。そしてJAコスモスが本格的に介護事業に参入するときには、ヘルパー養成講座も「ちいばっばスクール」でやったのです。すると一級・二級・三級合わせて七二人の資格者が誕生しました。勉強して有資格者になり、ここで終わっているJAはいっぱいありますが、JAコスモスでは終わりませんでした。学んだことを実践する場として、助け合い組織「ここにこ会」を結成しました。お世話する方もされる方も「ここニ」して欲しいという思いで「ここにこ会」と名前を付けたそうです。その特徴は全員が役割を持つことです。お料理班・ティサービス班・ホームヘルプ班というように、明確に班分けをして、誰もが得意分野で活躍できるような、おもしろい仕掛け作りをしました。次の写真は「ここにこ会」の研修会の様子です。「ここにこ会」というだけあって、本当に「ここニ」楽しんでそこに活動されています。

これだけではないんです。まだまだ続いていく。次から次へと展開していくのがJAコスモスのおもしろいところです。ここにこ会の活動を進めていく中から、お年寄りが求めているサービスには植木の剪定とか、庭に大きな岩があるからどけてほしい、天井裏にあるものを取ってほしいなど、力仕事で、女性だけでは難しいことがかなり多いことがわかりました。どうするかとまわりを見たら、いい技術を持っているのに定年退職で一線を退いてから家にこもる男性が地域の中にたくさんいる



ことに気がついたのです。

この男性たちに、一緒に助け合い活動をやってももらえないかと女性たちは考えました。しかし、女性だけの「にこにこ会」に男性は入りづらい。ならばいっそのこと、男性だけの助け合い組織を作ったらどうかと考えたのです。でも、いきなり助け合い組織と言ってもできません。そこでまずは、

男性だけの勉強会を開催しました。先ほどの「はちきんの店」で、「助け合い組織の勉強会を開きますが皆さん来ませんか？」とお声がけをしたら、全部で三十八人の男性が集まってくれました。その当日の勉強会では地域に住んでいる元校長先生の男性に講師をお願いしました。女性たちは講師の先生と事前に話をしている「男性だけの助け合い組織を作るところまで持っていきたい、それを頭に入れて、講義をやってください」とお願いをしていたそうです。

何が目的かを、ちゃんと女性たちは先生に伝えていたのです。先生はその通りに、その大切さ、楽しさを講義で話してくださいました。高知の人はお酒が大好きです。勉強会のあと

には、男性と女性一緒の飲み会もセッティングしました。いっ

ぱい男性にお酒を飲ませて、お酌をしながら女性たちはさやきかけます。「どうですか、男性だけの助け合い組織をやってみない？」そうしたらお酒の力も手伝って、みなさん満場一致で決定したそうです。「よし、やろう。男性だけの助け合い組織をやろう」と立ちあがったのが、全国初、男性だけの助け合い組織「赤い禪隊」です。平成一八年のことです。この活動もとても有名です。知っている方も多いと思います。この「赤い禪隊」と言う名前がなぜついたか？講師の先生が勉強会で「日本男児はいざと言ったとき赤禪を始めて頑張るもんじゃ」と言ったそうです。その言葉を皆さんが気に入って、そのまま名前になり、「赤い禪隊」と名前を付けたそうです。赤い禪隊では、四〇代から九〇代のお爺ちゃんまで約五〇人の隊員の方が活動されています。主な活動の一つ目は助け合い活動で、庭木の剪定やイベント時の誘導・送迎という男性ならではの活動。二つ目は医療や福祉の本格的な学習活動。そして三つ目は、自分たちも楽しむ活動でないかと長続きしないので、どぶろく造りや料理教室も本格的にされています。先日は味噌造りに挑戦したそうです。女性たちが何故男性たちに声を掛けたのか。もちろん自分たちでは手がまわらないようなニーズがあるからですが、自分たちだけでなく地域のみなが元気になって、それではじめて地域創生、地域活性化と言えるかと女性たちは考えたのです。少し沈んでしまった男性たちにも輝いてほしい、その思

いが男性たちに伝わって、赤い禪隊が生まれたのです。女性たちの活動が男性に広がったので、JAコスモスでは男女共同参画ではなく女男共同参画と、男女を逆にしているそうです。

写真を紹介します。庭木の剪定作業を行う「赤い禪隊」です。庭木の剪定どころじゃないです。重機を使われています。これは女性には無理です。この写真は学校の校庭の木を切っているところです。次の写真は楽しむ活動です。男の料理教室です。お魚を捌いています。本格的です。男性の皆さんはお料理されますか？私の夫は料理を結構やってくれます。そのコツは、やってくれた時に必要以上に褒めます。「すごく美味しい。もう最高」と言って、次に繋げていきます。皆さんのおうちはどうでしょう。さらに、衝撃の写真です。「赤い禪隊」が地元のお祭りに女装で参加したものです。韓国の人気グループKARAの扮装だそうです。初めは、ここまでするつもりはなかったのに、やり始めたら本格的にやりたい、つけまつけもつけたいと男性たちが言い出したそうです。女性たちが100円均一の店でつけまつげを買い、みなさんにつけてあげて、本格的な女装をしたという事です。その苦労の甲斐があって準優勝に輝いたそうです。この「赤い禪隊」は、全国的にも名の知れた有名な活動であり、いろいろな賞を受賞されています。評判を聞きつけ、他の地域でもやってみようと、男性だけの助け合い組織が全国的



に広がってきています。全国に影響をおよぼす活動にまで育っています。

さらに、JAでは、沢山の皆さんに地域づくりに参加してもらおうと掛けとして「あぐり三スクール」を開講していま



す。「あべりキッズスクール」は子どもたちの農業体験です。

「あべりミドルスクール」は団塊の世代向けの本格的な農業塾です。「あべりライフスクール」は地域の普通人達にJAのファンになってもらうためにやっているスクールです。これらが「あべりミドルスクール」です。対象を明確に三つに分けているところに特徴がありますが、もう一つの大きな特徴は、「あべりミドルスクール」の運営に、「JA女性部や」にここに「会」、「赤い禪隊」のメンバーが、先生やスタッフとして積極的に関わっている点です。こちらのスクールは皆さんの活躍の場にもなっているのです。女性活動から始まり、それで終わらないで広がりを持ち地域全体に浸透しています。この広がりによって、この地域は誰もが暮らしやすい魅力ある地域になっているわけです。紹介してきたJAコスモスの活動の特徴を三つ挙げてみます。

女性活動が次々とステップアップして核となって、新たに男性活動まで生み出していることが一つめの特徴です。二つめはJAが中心となった活動が地域全体を包括して、魅力ある地域を創造しています。JAの「あべりミドルスクール」JA女性部や赤い禪隊などのメンバーが積極的に関わることで、みんなで地域づくりを行っていると思います。そして三つめです。JAの女性職員である中村都子さんと女性部のメンバーが思いを一つにしたことから夢を実現させた。中村都子さんのような「コーディネーター」としての力が上手く発揮されるかどうかは、地域づくりの成果に直結します。JAにはこうした役割があるとい

うことが分かります。

ちなみに、女性の活躍について内閣府が調査した共同参画報告書があります。色々な項目で女性が占める割合を出して、四七都道府県に順位を付けています。働く女性の割合、管理職に占める割合、起業家全体に占める女性の割合の、三つの項目で、高知県が全国の中でトップです。女性が活躍することに寛容な雰囲気が高知県にはあるようです。この話を高知県出身の男性に聞くと「女性が『はちきん』で強いから何も言えないだけ」と言いますが、やはり男性の後押しがあつてこそ、こつこつ数字が出てくるのではないかと思います。

では、北海道はどうか。働く女性の割合は四七都道府県のうち二九位の四三・七%です。管理職の割合は少し低く、三三位の一一・九%です。そして起業家の割合は二七位の一一・五%です。全体的にちょっと低いというイメージです。皆さんは、どうお考えでしょうか。JAコスモスに伺った時、女性たちは「はちきん」だから「はちきん」だからと言つのですが、本当は奥ゆかしくてちゃんと立てるところは男性の事を立てているというのが私の印象です。だから「はちきん」というのはそんな前に出るばかりの強情なことを言つのではなくて、言つとき「はビシッと言つけれども、立てることも出来るバランスの良さ、そつこつイメージを私は高知県で受けました。

三・女性が興す「魅力ある地域」②

二つめの事例として広島県の事例を紹介します。広島県の世羅高原6次産業ネットワークのお話です。JAはあまり絡んでいません。こちらにも有名な取り組みであり、女性のパワーが大きな影響力を持って地域全体を牽引しているともわかりやすい事例です。

広島県の中部に位置する世羅高原には、地域農業を取りまく三つの危機が訪れました。水田を中心とした旧来からの農業が人手不足、高齢化、担い手不足によって衰退してしまっただのが一つめの問題です。二つめは、国営開発事業で農業団地が造成されたのですが、なかなか上手くいかなくて倒産するケースがいつぱい出ました。中には夜逃げする人が出ました。一部の農家は観光農園を始めて、なんとか打破しようとしたけれど、サービス業としてのノウハウがなくて上手くいかない、これが二つめの危機です。一方、地域には生活改善グループがあって、女性たちがいろいろな素晴らしい加工品を作っていたのですが、地域がこんな状況なので売る場所がない。これが三つ目です。このように、地域の農業が三つの問題を抱える中、これはどうにかしないといけないと、地域全体で取り組める目標を立てることになったのです。そこで考えられたのが「農業の6次産業化」でした。

そして世羅高原の地域全体で農業の6次産業化に取り組もう

ということが、地域で合意されました。農業の6次産業化は、今では有名な言葉になりました。東京大学名誉教授の今村奈良臣先生が、お作りになった言葉です。1次×2次×3次⇨6次ということ、6次産業化です。1次は1次産業の農業です。2次は加工です。3次は販売です。1次産業である農業が2次である加工、3次である販売まで一括して担うことによって、大きな効果を上げましようというのが6次産業化です。当初は1次+2次+3次⇨6次と足し算でした。けれども足し算では、1次産業の農業が廃れて、ないがしろにされても、2+3⇨5ということが残ってしまいます。1次産業である農業がきちんと主導権を握ることによって、本当の意味の6次産業化の効果が出る。そのため今村先生は掛け算にされたのです。そうすれば1次のところが0になれば、0×2×3⇨0になって何も残らない。それで掛け算の6次産業化です。今では政府の政策にも使われる言葉ですが、世羅高原では、掛け算の本当の6次産業化に取り組もうという目標を決めたわけです。

しかし、目標は立てたものの、どうやって取り組んだら良いかが分からない。そこで出番となったのが女性たちです。自分たちが今まで培ってきた女性の生活改善グループのつながりを下地として生産者の横のつながりを作りました。それが「世羅高原6次産業ネットワーク」です。平成一年のことです。地域の農業が危機的状況に陥った時、地域全体で6次産業化という目標を打ち出しました。その目標は女性たちの中にあっ

「この地域をなんとかしたい」「せっかく作った加工品をもっと売りたい」「もっと良い加工品を作りたい」という思いの受け皿になり、自分たちでネットワークを作ったわけです。

6次産業ネットワークでは、まず、共同でPRをするようになりました。ネットワーク会員のところを双六のようにどんどん回って行ける地図、一番からどんどん回って行ける地図のパンフレットを作りました。これを駅や直売所、会員のところに置いてあります。これは絶大な効果がありました。また、ネットワーク主催で大型のイベントを年に二回開催しています。広島市のアンテナショップにもネットワークとして参加するようになり、世羅高原という名前が広く知られるようになったのです。後ほど紹介しますが、ネットワークのオリジナル商品も開発しています。

また、研究会や情報交換も行っていきます。よくありがちなのが、ネットワークを作り、月に一度情報交換の会議をやりましょうで終わるところが多いと思うのですが、ここは違います。実際に女性たちが中心となって行動しているのです。その結果、ネットワーク活動と自家の農業経営がリンクして、相乗効果が生まれているのです。

ネットワークで年二回大きなイベントをやっていますが、そこには自分で作った加工品や農産物を持ち込むことができます。それによって、販売機会が増え、売り上げが格段にアップしたそうです。また、会員が互いの情報を交換し合うことで、自

分のところに来たお客さんに別の会員を紹介してあげるようになったのです。今までは同じ地域といっても広いですから、どこで何をやっているか意外に皆さん知らなかった。ネットワークを通じて情報を交換し合うことによって、例えばアイスクリーム屋さんをやっている女性は、お客さんに「ここをまっすぐ行くと、綺麗にチューリップが咲いているから、その農園に行ってみたら」とメンバーの観光農園を紹介します。お客さんが行くと、そこには、次のお店のパンフレットが置いてあり、先ほど紹介したアイスクリーム屋さんのアイスクリームを売っています。そうやってお客さんにいろいろなところを回っていただく。来客数を増やすのは難しいけれど、せっかく世羅を訪れてくれたお客さんに、世羅のいいところ余すことなく堪能してもらおうことで客単価がアップするし、顧客の満足度も上がっていきます。

売り場を提供しあう一方で、このネットワークが精神的な支えになって頑張れると言う女性もいらっしやいます。会員同士には同業者も多いのですが、足を引っ張り合うのではなく、むしろ良いライバル関係となって切磋琢磨しながら、地域全体を盛り上げる。そういうことに成功をしているわけです。結成当初は三三団体からスタートし、今は倍増して七三団体、一、四〇〇人のメンバーがいらっしやるそうです。

どんな効果があったか、数字で見えます(表)。平成一年にネットワークができました。いちばん左が、平成九年です。

ネットワークができる前の入込客数と売り上げが、平成二三年には倍増しています。入込客数では五七万人が一三五万人になりました。平成二六年に少し減って九二万人です。

売上額は、初め八億四、〇〇〇万円でしたが、平成二三年に一六億五、〇〇〇万円になりました。これもすごいです。倍増です。一番新しい平成二六年の数字を見ていただくと入込客数は減っているのに、売上額はバーンと伸びています。ということとは、先ほど申したように、一人のお

客さんが多くのお金を残してくれるようになったということです。具体的な数値に表れるまでに効果が上がっています。6次産業ネットワークの活動拠点として、夢高原市場という直売所が平成一八年にオープンしています。また6次産業ネットワークの事務局として、若い女性二人の雇用も実現しています。ネットワークができた当初は、所詮女の集まりだ、たいしたことはできないと見られていましたが、年々数字に表れるようになり、地域の皆さんの見る目が変わってきたそうです。

この写真ですが、活動拠点の夢高原市場という直売所の中の様子です。直

●町全体の入込客・売上が大幅にアップ

	平成9年度	平成22年度	平成26年度
入込客数	57万8200人	125万3700人	92万5400人
売上額	8億4700万円	16億5680万円	22億600万円



売所が出来て、さらに販売機会が増えました。お店にはネットワーク会員の方が交代で出ています。お客さんと対面販売することで、お客さんのニーズを肌で感じて自分の商品作りに生かすことができるようになったということです。

次の写真が6次産業ネットワークのコアのメンバーの方たちです。元々は女性のネットワークから始まったものですが、男性も多く入って、男女半々です。この日は女性のインタビューということで、女性ばかりに集まっていたいただきました。実は、この取材に伺った時、私の母親が病気でもう助からないと言わ

れていました。前もって集まっていたんだけどことになっていて当日に断ることができなかったので、泣く泣く、今日じゃありませんよと願いながら広島に行きました。心の中では「ネットワークなんて言っているけれども、家族が病気だったり自分が病気だったり、悩みごとがないからやってられるんだろな」なんて思っていたのです。そんな意地悪な気持ち、すねた気持ちで行きました。でもネットワークの皆さんのお話を伺っていたら、そんなことなかったのです。皆さん一人ずつ、いろんな思いを越えた先にあっけらかんとした明るさがあるなと思いました。大型の養鶏場を経営されている女性の方は元々専業主婦だったのですが、旦那さんが突然死されたのです。大きな養鶏場だったので、自分ではとてもやっていけないから、やめてしまおうと思ったそうです。でもその時にネットワークのメンバーが声をかけてくれたそうです「私たちがいるから大丈夫だからやってみようよ。うちに入んなさい」。それでネットワークに加入したところ、そこから力をもらって、経営をつないでいくことができました。今では西日本有数の大きな養鶏場の経営者になっておられます。また、ご主人の目が見えなくなって、病院の送り迎えをしながら活動している方もいらっしゃって、それを聞いたときに「あっそつか、みんないろんな思いがあっただらばっているのだ。じゃあ私もがんばろう」と思って、すごく印象深い取材になったことを今でも覚えております。



次にネットワークのオリジナル商品を紹介します。一つめが「世羅」とした梨ランニングウォーターというドリンクです。ネットワークには、世羅高校の生徒たちも入っているのです。世羅高校と言えば皆さん何を思い浮かべますか？そうです、駅伝です。この前、男女ともに優勝とニュースでやっていました。そして世羅といえば名産が梨です。駅伝と梨、その二つを結びつけて梨ランニングウォーターです。「世羅」とした「は、「サラッとした」をかけているんですね。「世羅」とした「は、「サラッとした」で「世羅」とした梨ランニングウォーター」。かわいいうべは高校生たちが考えたということです。ランニングウォーターは、発売から二年で一〇万本以上を売り上げるヒット商品になりました。このドリンクが、地域全体のPR媒体になっています。世羅高原の方が講演会をされると大体これを持ってきて皆に配ってくれます。とても美味しいです、本当に。世羅としていて、サラッとしていて、とても美味しいドリンクです。

そしてもう一つが写真の「せら弁」です。せら弁というブランド名を会員で共有しています。会員ごとに出しているお弁当



は違うのです。Aのお店のせら弁、Bのお店のせら弁というふうに、それぞれ特徴を持ったお弁当を出しています。価格は大体一、〇〇〇円位です。これについては、すごく強烈な思い出があります。先ほどのお写真の女性に集まっていたとき、せら弁を出してもらいました。加工場をやっているある女性が作ったせら弁(写真)です。

彩りも綺麗でとても美味しいお弁当でした。私はふたを開けて「わー嬉しい」と食べ始めました。そうしたら周りの女性たちが、どんどん意見を言い出したのです。「これ肉が多い」「油ものが多くて胸がもたれちゃう」「何かと何かが隣同士だと味が移るからだめじゃない」と皆さん意見を言ったのです。私はびっくりして、作った女性がどんな顔しているかと見たら、鉛筆片手に「それでどうすればいい?」と、熱心にメモをとっていました。その後、その女性にこっそり「皆さん結構きびしいですね」と聞いたら「仲間から意見を言ってもらわないと、お客さんにそう思われたら次の売り上げにつながらない。それがこのネットワークなのです」という答えが返ってきました。単なる女性の集まりや群れとは程遠い、一人ひとりが経営者と

して自立している、6次産業ネットワークの本質を見た思いがしたエピソードでした。

このように世羅高原6次産業ネットワークは、大変な効果を生み、今や全国的にその名が知られるようになっていました。たくさんさんの賞も受賞されています。でも、立ち止まったりしないのです。次の目標を、すでに立てていらっしゃるのです。それが「日本一大きく美しく豊かな農村公園プラン」です。どういうことかという点、6次産業ネットワークはとっても成功しました。けれども地域の中では、「6次産業ネットワークの一人勝ちだよな」「いいよね、6次産業ネットワークは」という意

次なる新しい目標！

***日本一大きく美しく豊かな
農村公園プラン***

- 柱の1つが、地域まるごとを巻き込んだ、新しい「民泊」の提案
- 6次産業ネットワーク(農業・畜産・花観光・加工)、観光協会(宿泊)、飲食組合(食事)、商工会(販売)がタッグを組んで、役割を分担
- 町の魅力をアップさせ、集客力・客単価につなげよう

***世羅高原
6次産業ネットワークの特長***

1. 女性活動を下地とした「ネットワーク」が、地域全体を底上げしている
2. 「ネットワーク」と自家の経営がリンクし、より大きな効果が生まれている
3. 「共存共栄=Win-Win」の関係で、地域のみみんなで幸せを分かち合う

見があったそうです。でも、これではその地域全体を包括しているとは言えないと皆さんは考えたのです。もっとみんなで分かち合って、Win-Winの関係になつたらどうだろうかというところがこのプランです。

その柱の一つが、地域をまるごと巻き込んだ新しい民泊の提案です。通常民泊と言うと都会の人たちが農家のやっている民泊の施設にやってきて、農業体験と一緒にやって、夜は自分でとった農産物を一緒に食べて「ああ美味しいな」と言つて、薪で焚いたお風呂に入り、夜は星空を見て蚊帳を吊つたところに寝て「命の洗濯ができました、ありがとございました」と言つて帰って行く。それがよくある民泊のかたちです。これだとその農家のところにしか来ないです。そこで考えたのは、それをみんなで分担しましょうということなのです。農業体験は農家のところで行う、食事は飲食協会で世羅高原らしいメニューを開発しそこで食べてもらう、夜は農家民泊してもらう、お土産は商工会で販売する。みんなで役割を分担し、町の魅力をアップして集客力、客単価アップに繋げようというのがこちらの民泊です。

その一つとして、今、世羅高原カメラ女子という取り組みをやっています。カメラ好きな女性を募集して、カメラを持って地域を回ります。ネットワーク会員の酪農家のところに行つて、牛の写真を撮る。夜は農家民宿に泊まる。翌朝、開園前の観光農園のお花畑に行つて、だれもないところでお花を撮影

する。昼ご飯は、お母さん達がやっている野菜たっぶりのバイキング料理を楽しむ。デザートには、会員が販売している手作りのジェラードを味わう。こんな風にして地域くまなく回つてもらつて取り組みをやっています。毎回とても人気で、四〇人近くの女性に参加されるそうです。このようにして、新しい農村公園プランが動き出していると伺いました。

この6次産業ネットワークの特徴を三つ挙げます。一つは女性活動を下地にしたネットワークが地域全体を底上げしている活動だということです。二つ目は、ネットワークと自家の経営がリンクして、より大きな効果が生まれていることです。そして三つ目、共存共栄Win-Winの関係で、地域のみならず幸せを分かち合う活動だということです。

ご紹介した二つの取り組みはとても有名です。ネットで検索すると、いろいろな情報が得られます。そちらの方も参考にしてくださいだけばと思います。女性たちが中心になつた二つの活動を紹介しました。この他にも全国にはたくさんの女性活動があり、魅力ある地域を興しています。北海道にもいっぱいあるのではないのでしょうか。

四．女性活動は地域の「バネ」と「接着剤」

冒頭に、女性活動は地域のバネと接着剤だという話をしました。女性にはバネと接着剤の力があって、それが発揮されてい

ると話しました。ではそれがどういうことか、紹介した二つの例からお話したいと思います。まず心の中のモチベーション、これを「バネ1」と言いますけれども、これで活動が始まりません。それが繋ぎあう力「接着剤1」を発揮します。それが外へ外へと広がって行きます、「接着剤2」です。その結果として飛躍する力、跳ね返す力、「バネ2」が生まれます。どういふことを先ほどの事例にそつて考えてみます。

まず一つめのバネの1は心に芽生えたモチベーション。活動は何かから始まっていたのか。

事例一のJ A コスモスではお母ちゃん達にお小遣いを作つてあげたいというJ A 職員の中村都子さんがいました。また、農家の方たちには農家の良心を届けたいという思いがあったのです。ここから活動が始まったと思います。

二つ目の事例、世羅高原ではどうだったか。女性たちのもっと作りたい、もっと売りたい、この地域を何とかしたいという思いから始まったのです。儲けたいではなく、別のところから始まるということが一つめのポイントです。このように心に芽生えたちよつとした思い、これを摘み取ってしまうと何も始まらないということが二つめのポイントになります。

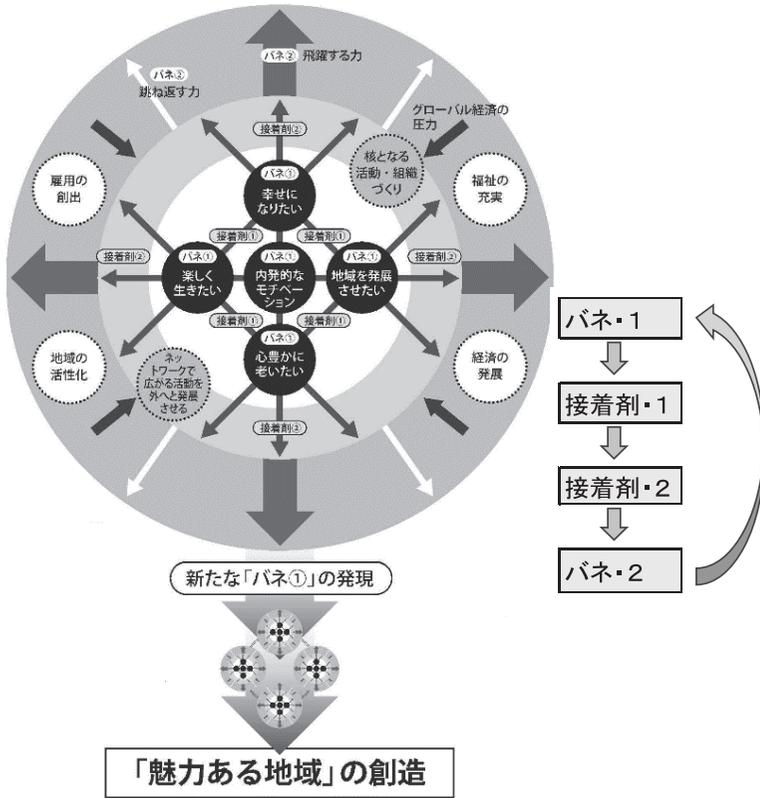
そして次にどうなっていたか。「バネ1」で始まった小さな活動がお互いを呼び寄せ繋がりあって、核となる活動や組織作りへと発展していったと思います。事例一では直売所「はちきんの店」を女性たちが自力で設立した。

事例二では女性の生活改善グループを基礎に、6次産業ネットワークを結成した。同じ思いを持つ人同士が繋がりがあつた。これが接着剤の1です。

そしてそれがどんどん外に広がっていた。これが接着剤の2です。事例一では「はちきんの店」を建てた後、そこでは終わらずに「ここ掘れワンワン塾」で、どうやって売ったら売上を伸ばせるかを勉強したと思います。その次には、そこで得たお金を元に自分達の生活を楽しむための勉強「ちいばつばスクール」をやりました。学んだ事を無駄にしないように「ここにこ会」を結成しました。その「ここにこ会」が元となって、男性だけの助け合い組織「赤い禪隊」にまでいった。ひとつの活動がそれで終わらずに、次から次へと展開したと思うのです。一つのところで立ち止まらない。これが三つめのポイントです。

事例二ではネットワークを作つただけで終わりません。ネットワークを作つたから月に一回会えばいいで終わりません。オリジナル商品を開発し、共同PR活動をし、活動拠点「夢高原市場」を立ち上げ、次から次へと立ち止まらずに活動を広げたいと思います。

その結果、飛躍する力、跳ね返す力、バネ2が生まれる。事例一では「はちきんの店」は支店がどんどん増えました。また「あぐり三スクール」では地域活性化が進み「赤い禪隊」をお手本に、全国各地に男性のたすけあい組織が次から次へと誕生する。そのような影響力を持つまでになりました。



また事例二では6次産業ネットワークの成功だけで終わらずに、次の目標に向かって動き始めて、発展していたと思います。それを図にしたのが次の図です。研究員仲間が「曼荼羅図みたいですね」と言っていますが、まさに曼荼羅図なのです。右側に

簡単に書きました。パネ1から接着剤1、接着剤2、パネ2。そこでまた新たなパネが生まれていく。この循環が魅力ある地域を作っていくと私は考えたのです。そうすると、女性活動は経済性に乏しいと軽視され、「本人達が楽しんでるからそれでいいんじゃない」と揶揄されるのは、少し片寄った考え方であることが分かると思います。

五. JAにとって「女性力」とは？

次にJA組織にとって女性力とはどんな意味があるのかを考えてみたいと思います。JA組織は地域と読みかえてもいいです。一つめですが、農業現場で女性の力は不可欠です。皆さんもよく分かっていると思います。農業者の割合では女性が四割を超え、半分に迫る勢いだと言われます。質の面でも女性は農業現場に欠かせないと言われています。二つめは、とても大切なことです。女性の持つ暮らし目線、目的意識の重要性です。ご紹介した二つの事例でおわかりの様に、女性は銭勘定ではない暮らし目線や目的意識が強いです。それがパネとなって継続性が生まれます。儲けが目的だと儲からないと辞めまです。儲けとは別に目的意識を持っていると、ちょっとくらい厳しくても、やろうかなという風に継続性が生まれます。継続性が地域の活性化に結び着く。そのパネに

なっている。だから女性の暮らし目線、目的意識はとても大切です。

それに関連して、とても重要なことですが、地域では女性たちが彩り豊かな活動を通して魅力ある地域を興しています。そして、日本人の価値観は変化して、自分の住む地域の豊かさを以前にも増して望む様になっています。そうであるならば、誰もが暮らしやすい地域を作るためには、女性の力を存分に発揮してもらうことが近道なのではないでしょうか。とりわけ地域に密着しているJA組織においては、女性を持つ影響力の大きさへの認識をいま一度新たにする必要があります。

そこで提案したいのが「ウーマン・ローカル・JANミクス」の実践です。この言葉は、私が作った言葉です。「ウーマン・ローカル・JANミクス」というのはどういふことか。ウーマノミクスは女性パワーが経済を牽引しますという意味。それプラス、ローカルアペノミクス、おなじみの地方創生。女性パワー、女性パワーと言われます。地方創生と言われます。ただ、地方と女性繋がっていません。地方創生と女性活躍という子育て支援の話に片寄ってしまいます。これはこれで凄く大切なことですが、子育て支援問題が解決すれば女性の活躍は全て丸く納まる、そついう流れがあるのではないかと思えます。もつとそれぞれの地域、地方で頑張っている女性たちを支える意識を持つことが大切ではないかと思えます。いっそのことJAの女性達が中心となり、女性と地方を結びつけたら

どうしようというのが私の提案です。女性が中心となってそれぞれの地域からJAの総合力を活かした新たなアイデアを発信しようとの意味を込めて、「ウーマン・ローカル・JANミクス」を提案したいと思えます。どんなことがあるか、皆さん考えていただきたい。JA改革が叫ばれています。何かしないといけない。そういう時こそ新たな声をあげるチャンスが来ていると思います。

そももつ一つ提案をしたいのですが、JA女性部・JA女性役員がコラボして地域の棚卸しをしましょうということ。地域の棚卸しを女性が中心になってやってもらいたい。女性たちはバネの宝庫です。隠れているバネを探してみてもどうでしょう。私は、女性の皆さんに集まってもらい講義する機会が結構あるのですが、講義のあとにグループ討議などをすると、たつた三〇分くらいで意見がいっぱい出ます。これが埋もれてしまつのは本当にもつたないのですが、どこに言つたらいいのか分からないと皆さんはおつしやいます。このような地域に埋もれているバネを見つけることを、JAの女性役員の方、職員の方にやっていただきたい。さらに、バネとバネとを結び付ける接着剤になるにはどうしたらいいのかまで、踏み込んで考えてほしいと思えます。

どうやって女性たちの意見をくみ入れるか。昨年『日本農業新聞』で北海道のJAびばいが開催した女性限定の地域座談会の記事を拝見しました。男性がいるところだとなかなか本音を

言えないが、「女性同士だと本当の事が言えました」という意見が多く出たそうです。JAでも女性たちの想いを今後の運営に活かしたいということでした。

また今、新たに多くの女性理事が誕生していますが、皆さんに聞くとなかなか理事会で意見をいうのは難しいと言います。特に女性枠からの選出では、女性枠の理事だからと除けられてしまうことが多いそうです。地域枠ではなく女性枠であると。こんな時、たとえば女性限定の座談会をしていたら、地域の女性の総意ですと勇気を持って発言出来ると思います。こういったものは大切だと思います。

また、JA運営の女性参画主要三指標として、正組合員は二五%以上、総代一〇%以上、理事二人以上の目標をJA全体で掲げています。そもそもなぜ、女性が必要か。一つめですが、女性の能力が男性と同じように評価されるべきだということがあります。男性と女性同じ様な能力を持っているなら平等に評価されるべきということが基本にあると思います。二つめは、女性の暮らし目線や新たなセンスをJA運営に活かすことでJAの可能性が広がるからです。いままで凝り固まって出口がなかったところにちょっと新しい意見を入れると出発点が見えてくるかもしれません。

例をお話ししますと、山梨県のJAのほくには女性の常務がいます。有名なのでご存知の方もいるかもしれませんが、仲澤さんという女性常務は新しいアイデアをどんどんJAの運営に活

かしています。一つが米袋です。JAのほくは梨北米というブランド米を売っています。幻のお米と言われているのですが、このお米を売る際に真っ黒な米袋を使っています。お米の世界では黒い袋はタブーだそうです。だいたい普通は白、色が入っても何色かだけです。梨北はあえて真っ黒な袋に梨北米と金文字で書きました。ぱっと見てすぐ目が行きます。取り入れたのが女性の仲澤常務です。このように視覚に訴える点、デザイン性に女性は敏感です。そうしたセンスを活かすことでJAの可能性が広がると思います。

そして三つめです。大切なところはこれです。地域の女性の意見を汲みとる役割です。さきほど申したように、地域に行くといひバネがいくつかあります。それをだれかが摘み取ってあげないと育たない。しかも摘み取って育ててくれる人が、JA運営の場に意見を言えるくらいの立場の人でないと活かされません。ですから役員や管理職といった決定権のある人に女性が必要です。これによって地域の女性の人たちの思いが実現しやすくなる。その役割がJAの女性役員や女性管理職にはあるのではないのでしょうか。

女性の登用を行う上で大切なのは、女性自らが積極的に学び実力を高めることです。女性は男性に比べて経験を積んでいないことが多く、教育や学習の機会が格段に少ないという歴史的な経緯があると思います。男性の方が経験値を高める場面に出ることが多く、女性はなかなかそういう機会が無かった。これ



からは埋めていかなければならない。女性の側もそれを待っているのではなくて自分達はこういうことを学びたい、こういう先生を呼んでくださいとJAに上げていくことが大切です。JAならではのトレーニングシステムの構築を女性が地域の現場から提案する。待っているのではなく自分たちでどんどん提案していく、それがとても大切だと思います。女性週刊誌やファッション誌が変化していると言われます。これまでは芸能ゴシップやファッションが中心でしたが、このところアベノミクスに対する意見、原発問題、安全保障問題、憲法改正などの堅い記事が載るようになりました。それが多くの読者の共感を得ているそうです。女性全体の意識の高まりが全国的に見てとれるのではないのでしょうか。

JAの面白い取組み例は、JA女性理事による自主的な勉強会です。長野県のJA信州うえだでは、理事会を開催した直後にやっています。理事会に初めて出た女性は言葉がわからない、何を言っているのかわからないといったことがあります。理事会が終わった直後に女性だけで集まって、今日は何がわからなかった？と話し合うそうです。わからなかったら、すぐに調べて勉強会をする。女性理事たちが、自分たちの遅れている分を取り戻す取り組みをするJAが増えてきており、こうしたJAはそのうち頭角を現してくると私は楽しみにしています。

女性の教育プログラムや支援体制を考える際には、女性の多様化を考えなくてはなりません。女性の働きかた、農業への関

わり方、生き方は多様化しています。多様化に対応して教育、支援方法も彩り豊かなものにしていく、画一的でないものにしていくことも大切です。農家のお嫁さんも兼業化が進んでいきます。他に仕事をもっている方、子どものいる人いない人、結婚している人していない人、それに対応したいろいろな選択肢を準備すると思います。

また、起業の形も大きく変化しています。農村女性の起業の形について、農水省が二年に一度行っている起業活動実態調査があります。

今春平成二六年度の新しいデータが発表されました。農村女性の起業数では、今回の調査で初めて個人起業がグループ起業を超えました。個人で起業しようと思っている人が増えていく。個人でやるとなると悩みも多いです。どうやったらいいのだと悩むと思います。だったらJAがその窓口になる。JA女性部や女性役員が地域女性の相談窓口になりますと看板を掲げることが、とても大切だと思います。

同調査で、起業活動をしている人に、今後の事業をどう展開していきたいか聞いたところ、拡大・新規展開したいという人が一九・一%。二〇%近くがもっと大きくしたいと答えています。逆に縮小廃業したいという人は六・一%しかいません。これからも新規展開の後押しをしていくべきです。

どんなところで拡大したいかについて尋ねると、一番目は農産物加工で三五・二%。二番目は都市との交流事業で二五・七

%。三番目は生産物加工品の販売で二四・七%です。JAはこの人たちが作ったものの売り場の確保が大きな仕事になると思います。ファーマーズマーケットや直売所だけではなく、いろいろな方法でこの人たちが売りたいという気持ちをすくってあげること、JAの大切な仕事になると思います。

これまで女性活動は地域のバネと接着剤ですと紹介しました。そして地域に密着しているJA組織では、女性の持つ影響力の大きさについて認識を新たにしてほしいということをお話しました。そのなかで「ウーマン・ローカル・JAノミクス」という提案をしたわけです。JA女性部や女性役員を中心に地域の女性たちのバネをすくい上げて、JAの方針や新たな取り組みに繋げてほしい、そのためには地域の棚卸しをしまじょうということを提案しました。

六. 意識改革のススメ

— 外的意識改革と内的意識改革 —

いま、女性活躍、女性活躍と呼ばれますが、いくら制度が整っても日本に根強く残っている意識を変えないと、なかなか女性の活躍は進んでいかないと思います。そこで意識、心の問題に触れたいと思います。それを変えて行くには「外的意識改革」つまり外側から変えていくことと「内的意識改革」内側から変えていくことの二つが必要だと思います。男性の方もい

らつしゃるので申し訳ないですけども、外側の意識改革の二つめは、男性中心の社会通念の払拭です。長時間労働を基本とした働き方ではない女性らしい働き方の提唱です。女性が働きやすいということはイコール男性も働きやすいということです。農業の現場でもそうですが、農業者の半分が女性なのに、何故か女性は旦那さんに付随するという雰囲気が多々残っていると思います。そういった考え方を社会全体で無くしていく。女性も大切だと頭の中を切り替えていくことが必要です。

外的意識改革の二つめは男性の中にあるジェンダーバイアス、偏見や固定観念の払拭です。男性は嫌な思いになるかもしれないませんが、少し耐えていただきたい。例をひとつ言います。「予言の自己成就」という言葉があります。「女性はどうせ辞めてしまつ」「どうせ困難な仕事は出来ない」と考える男性上司がいたとします。そうするとその方は女性の部下に必要な教育や成長のきっかけになる機会を与えない。そのため、いざという時になると女性は経験不足、勉強不足ですから失敗します。そうすると「ほれみたことか、オシの言つたとおり、やつぱり駄目だった」となる。これが予言の自己成就という現象だそうです。女性登用で女性の管理職も増えています。これにも注意が必要です。登用だけして放っておく。お手並み拝見というところで後押ししない。そうするといざという時に失敗してしまいます。後押しがないと経験値が無いから難しい。そうでは無く、女性を登用して女性を育てていこうという目を持って、背中を

そつと押すことを男性にはお願いしたいと思います。JAGグループの職場も同じです。女性の正組合員数は何%にしよう、理事数を増やしようと言っているけれども、JA自体の職場に男女差があるとしたら、それでは組合員の女性登用なんて進むわけがないです。JAの内部でも女性の後押しをしましよつというのが外的意識改革の二つめです。

男性のことばかり悪く言つて申し訳ないのですが、ジェンダーバイアスは女性同士にもあると言われています。足の引っ張り合い、牽制などと言われます。それをなくそう、というのが三つめの外的意識改革です。面白い調査結果があります。出来る女性は同性からも嫌われる。成功と好感度は男性の場合は比例するのに女性は反比例するという調査結果です。アメリカの研究者がやった実験です。一人の女性の成功事例がありました。学生を二つのグループに分けて、Aのグループにはアリスという名前の女性の成功事例として発表し、Bのグループにはボブという名前で同じ内容を発表しました。それは女性の事例だったのですが、Aでは女性の名前、Bでは男性の名前で発表したのです。そうしたら学生たちはどう答えたか。男性の名前で発表した方は「こういう上司の下で働きたい」「私たちもこういう風になりたい」というふうにすごくいい意見がでましたところが女性の名前で発表した方では「この女性は出来る人かもしれないけれど、自分はちょっと苦手です」「この人の下では働きたくありません」といったすごくわかりやすい結果が出

たそうです。このように、女性の中にも男性の中にもジェンダーバイアスがあると言われているのです。

女性の社会参画は発展途上です。先を進む女性にどんどん行ってもらった方が後から行く女性は通りやすいと私は思います。女性同士で足を引っ張り合っている場合ではないのです。

先に行ってくれる人にはどんどん行ってもらい、そのあとを通りやすくしてもらった方が得策なのではないか。協同組合を考えると、多様化を受け入れてみんな幸せになりましょつというのが、協同組合ではないかと私は信じております。ぜひ実践したいと思っています。

しかし長い歴史がありますので、社会全体の通念を変えていくことはそうそう簡単にできることではありません。できることは何かというのが内的意識改革です。女性自身の内的意識改革をしましょつということを提案します。私たち女性自身が勇気を持って一歩踏み出しましょつということです。

これも例を出します。インポスター・シンдрロームという言葉があります。これは理由もなく自分を過小評価することです。男性よりも女性に圧倒的に多い症状だそうです。インポスターというのはパテン師のことです。私もこんな堂々としているように見えるかもしれませんが、ものすごく自己評価が低いです。いつも自分に自信がありません。これはどういふことかということ、自分は回りから評価されているが、嘘がばれる日が来るかもしれないと考えることです。だからパテン師なのです。こう

いう傾向が女性には強いと言われています。

私は今までいろいろな女性を取材してきました。ロールモデルが無いから女性は管理職を引き受けてくれないという話をよく聞くと思いますが、今まで私が取材して来たような人達に伺うと「ロールモデルなんて無かった。ロールモデルなんてあったらその人と同じようにやらなきゃならない。やりづらいたら無くて良かった」とみんな言つのです。これぐらいの勢いが必要かもしれません。出過ぎた杭は打たれない。それぐらい突っ走ってしまうのが大切かもしれないと思います。女性の社会参画はまだ始まったばかりです。女性に不利なバイアスが多く存在していることは承知の上です。追い風が吹いている時に、その風に乗ってふわりと上昇した方がいい、そのように思っています。そういつ時に応援が必要です。女性だけの力ではまだまだ無理です。繰り返しになりますが、女性の参画はまだ始まったばかりです。だから地域全体で女性を後押しする応援が必要だと思えます。そして、大切なのは、女性のほうも応援者の力を借りる柔軟性、肩肘張って自分だけでやるうなんて思わないで、いろいろな人が力を貸してくれるならその力をありがたく借りる。そういう柔軟性も必要ではないかと思えます。

私は偉そうにこんなところに立って研究員ですとお話していますが、実は研究者になったのは五年ほど前です。歳は食っています、研究者としてはまだ日が浅いです。それまでは事務職をしており、長く総務部の総務課長をやっていました。総

務課長というと格好いいですが、小さな団体なので何でも屋です。電話も取るし、銀行にもいく。そんな日々を送っているときに「研究職にならないか」となったのです。私は迷いました。私なんか出来るだろうか、ちゃんとした勉強もしていないのに大丈夫かなと思ったのです。その時、ここで一歩足を踏み出さないと多分このまま人生終わるなと思ったのです。そこで勇気を持って一歩踏み出しました。そのとき後押ししてくれた方がいました。上司もそうです。先生もそうです。後押ししてくださる方がいたので、私は一歩踏み出すことができました。一歩を踏み出す勇気と後押しのお借りすることの重要性が私には身に沁みています。今でも私は悔しい思いをすることも泣くこともあります。けれども、一歩踏み出さなければ良かったのかというと、あのとき一歩踏み出して良かったと毎日思っているわけです。女性の皆さん、一歩踏み出す機会があったら是非その勇気を持っていただきたいと思います。

七. まとめ—今なぜ「女性力」なのか？

冒頭の問いに戻ります。今なぜ女性力なのか。女性たちの活動は何から生まれていたのでしょうか。それは楽しく心豊かに生きたい、地域の人々で地域を何とかしたいという、内なるモチベーション、バネ1からだったと思います。バネ1は何かと一緒に。それは変化した日本人の考え方、価値観と一緒に

はないでしょうか。経済一辺倒ではない心の豊かさといコールではないでしょうか。価値観が変化した今、新たな価値を作り出す新たな目線が必要です。だからこそ女性の力を発揮する時ではないかと思えます。いい種をまけばいい実がなる、幸せになりたいという種をすればそれを実感できる魅力ある地域という実がなると思えます。けれども、種を蒔いただけでは実はありません。そこには慈しみ育むという目線が必要です。ぜひ地域にある芽、そして女性の中にあるバネを大切に育てていきたい。そして地域の元気を都会の方にも発信していただきたいと思えます。その先に誰もが暮らしやすい幸せに満ちた魅力ある地域が待っていると思えます。

最後に、私の大好きな言葉をご紹介します。終わりたいと思いません。「幸福は自分の力で作り出すもの。幸福は行動の中にしかない。自分が芝居に出るとなると退屈などしていられない」これはフランスの思想家アランの幸福論の中にある言葉です。私の大好きな言葉です。女性の皆さんは地域のバネと接着剤です。女性の一人ひとりが勇気を持って一歩踏み出しましょう。それを地域全体で後押しをしましょうということを強調してお話を終わりにさせていただきます。ご静聴どうもありがとうございました。

質
疑
応
答

司会 小川さん、どうもありがとうございました。大変興味深く、また大いに賛同しながらお聞きしました。最後の方におっしゃった「予言の自己成就」は、私たちもそんな風になっているのではないかと深く反省した次第です。大変貴重な機会であります。時間ももう少しありますのでご参会の皆さんからご質問・ご発言をいただきたいと思えます。ご発言の際は記録を作りますので所属とお名前をお願いします。



梅田 今日貴重な機会をありがとうございました。道庁

の空知総合振興局の農務課で女性農業者の活動を担当しています梅田と申します。質問させていただきたいのは配布資料の六ページの女性自ら積極的に学び実力を高めていくことという提案の部分です。お話にもありませんでした美唄の女性農業者を中心にして、地域の女性農業者が集まって自ら学ぶグループが北海道ではできてきています。私も彼女たちの活動に大変注目し

て学習会などに参加しています。夫婦で農外から新規参入した方も、実家が農家で跡を継いだ女性の農業者もいますが、大部分は、配偶者がUターン就農した、配偶者が農業者であったという理由で農外から参入した女性が多いです。彼女たちが口をそろえて言うのは、やはり学ぶ場が少ないことです。営農に必要な知識を学ぶ場が無いのです。彼女達は、肥料のことや人を雇う際の保険や就業規則について学ぶ場を自ら作っています。JA信州うえだの女性理事の学ぶ場の話がありました。他にもJAならではのトレーニングシステム、農外から参入した女性の参考になる事例をご存知でしたら教えてください。よろしくお願いします。

小川 いろいろところで勉強会をやっていますが、農外から入られた方の勉強会としてパツと思いつく事例はないです。宮崎県のJA尾鈴の女性部では女性部卒で新たに総代が生まれました。その総代の心得を学ぶために女性部の総代研修会を女性部主催で開いています。地域で何か学びたい、こういうことをやって欲しい、営農で抱えている悩み、問題点がはっきりしていたら、女性部担当の職員に繋いでいただくと、専門家を呼びましようと思えます。何をネタに研修会をやりたいのか担当者たちも悩んでいます。何を勉強させたいのかわからない。具体的にこれを学びたいということをJAや行政の窓口上げると計画を立てる方も助かると思えます。そ

の地域では何が問題なのか、ハッキリしているのは一歩進んでいると言えます。ぜひ声を上げていただきたいと思います。

森 農水省の審議会や道庁の審議会などの委員をしています。本業は作家で森久美子と申します。小川さんには私の論説文の発表ですとか著作の編集もやっていただいております。お世話になっています。こういう形でお話を聞くのは初めてなので、普段接しているとはまた違う、体系化されたいろいろなことをご存知なことに、改めて尊敬の意を抱きました。お疲れ様でした。質問が二つあります。一つは、世羅高原6次産業ネットワークの中で夢高原市場の客単価が上がって売上が伸びているという話がありましたけれども、これはネットワークの会員さんだけのものを売っているのでしょうか。

小川 そつです。ネットワーク関係です。

森 地域の特産物だとか広島のお土産等は置かない場所なのですね？

小川 いえここに出ている数字は夢高原市場全体の数字ではなくて、そのネットワーク会員の中での数字です。

森 わかりました。次の質問ですが、男性の理解という



ことで最後の方の外的意識改革に関わることです。個人的にいろいろな府県に呼ばれ、女性の参画を期するために決起する年でしたので、JAでは総代会に総代でなくても出て、どんなことを話しているのか一緒に体感して欲しいという試みをしていました。それは大変大事だと思えますが、女性は参画しなければならぬからこういう場をお客さんの提供しているという匂いがプンプンするケースもあります。そのことについてどう思われているか、お聞きします。

二点目は、意識改革のススメの中で男性中心の社会通念の払拭の次に、長時間労働を基本とした働き方ではなく女性らしい働き方の提唱と書いていらっしゃいました。まったくおっしゃるとおりだと思います。今日お集まりの北海道の農家の方たちは、男性と同じだけ長時間労働をしている農家です。社会参画としてJAの活動や個人的な販売を始めたらそれプラスでもっと長時間になります。おっしゃっていることは、もっと精神的なことですが、この壁をどうやって乗り越えたら女性たちは自己表現として社会参画できるか、北海道ではよく聞かれます。私はいつも返答に迷いますが、お考えを聞かせください。

小川 二つめの長時間労働の質問ですが、突破するのは本当に難しい問題だと思っています。書くのは簡単ですが、どのように女性の側から突破していくのか、とても難しい部分であると思います。まず外的意識改革としたのは、男性にそういう



ことではないということを理解してもらいたい。その思いがすごく強くて、女性が突破していくのは難しいので、男性にこういうことではちょっと違うんだよねということを理解してもらいたいという思いで、外的意識改革の一番目にあけています。

女性の場合は家事の負担も大きく、子育てもある。例えば家族に病人が出た場合も女性が担う。お年寄りが出て介護となったら、女性が担う。男性もやる人が増えていくとしても、役割分担として外せない部分がある。そのあたりをまず男性に理解していただいて、女性はそういうところを担っていると思っただけで、プラスアルファにならずに、引き算をしてトータルで同じ働きになれるようにぜひ意識を変えていただきたいと思えます。ピント外れな答えだと思えますが、わたしも答えが出ていないところなんです。いいご質問をいただきありがとうございます。今後も考えていきたいと思えます。

司会 女性が大方担っている家事労働や介護の分野についても同じように評価していく必要があるというニュアンスだったと思います。たしかにその通りですね。

黒澤 地域農業研究所の黒澤と申します。私共はなかなか



全国を俯瞰した情報に触れる機会が少ないので、今日は貴重なお話を伺いさせていただきありがとうございますございました。お話のすべてに共感共鳴するところです。ネットワークについて、私も無造作にネットワークという言葉

を使いますし使いたがります。いろいろなグループの方が多数ノミネットされてひとつの総合活動をやっていくということをして私たちはネットワークという位置づけをするのですが、ネットワークのもう少し突っ込んだ概念規定があればお聞かせ願いたいと思います。もう一つは、私も女性グループと呼ばれてお話をした時に、冗談めかしてこんなことを言ったことがあります。「私が変われば、わが家が変わる。我が家が変われば、地域が変わる」と話しました。輝く女性、地域を変えていく女性というのはその配偶者である男性のパートナーシップが非常に有効に効いていると思います。それに関してお考えがありませんでしたらお聞かせいただきたいと思います。

小川 いらご質問をありがとうございます。まずネット

ワークについてですが、まさに私も同じです。ネットワークというものは、きちっとした固有概念よりも、人と人を繋いでいくものと考えています。形に決まったこういうものがネットワークですというよりも、人と人との心の繋がりの中で新たな可能性が広がっていくもの、そのように私は考えています。6次産業ネットワークはそういうもので、ここに集っている人たちの心と心を繋ぐことで、地域全体が新たな展開を迎えている。それがネットワークじゃないかなと思っています。単に連絡事項だけの会議をするとか、その役員を決めてということではなく、本当の心の繋がりが新たな展開を生む、それがネットワークじゃないかと思っています。これが私が考えるネットワークです。もうひとつ配偶者のお話をされたのですが、これはドンピシャリだと思っています。いろいろな女性活動に行くのですが、女性が輝いていると旦那さんも輝いています。ご夫婦揃って素敵という例は本当に多いです。私は次のテーマとして夫婦という単位も調べてみようと思っているくらいです。どっちが偉いとなっていないと思うのです。女性が活躍すると男性が面白くないとなる。これは何故か。勝負だと思ってしまうからです。奥さんとの勝負、女性との勝負です。でも、戦う必要は無くても両方が輝けばいいんです。それが出来ているところは、やっぱり伸びていっていると思います。男性の後押しもあると思います。女性が輝いているところは男性も輝いている。奥さんが素敵なところは旦那さんもイケてる。私も感じているところです。



司会 まだまだ意見交換したいですが、そろそろ時間になってきましたので、最後にお一人ご発言がありましたら。

中村 北海道女性農業者ネットワークきたひとネットの中村と申します。お話を聞いていて六次化も大変大事ですが、北海道は専業農家が非常に多く、第一次産業の担い手としてお嫁さんとして来て、主要な担い手となっていくわけです。配偶者として入ってきて、六次化によりいろいろな新しい情報が入ってくると思います。ところが自分の経営中心に広大な畑作であるとか、酪農であるとか、その経営に向き合ってやっていこうとする時に、技術や新しい政策が女性のところまで下りてこない。男性中心に、経営者へ流れるから女性には流れてこない。それが、女性が経営に参画したり、農協に入ったりする際の壁になると考えております。

経営に向き合っていく女性のために、お嫁さんも新規就農者としていろいろな学ぶ場や技術を獲得する場を北海道では作っていくべきではないかと考えています。女性の畑作農家も自分たちでトラクターの使い方や機械の部品交換を勉強したり、GPSについて勉強したりと頑張っているグループもあります。そういったところにぜひ農協も支援して、この人たちが先々の経営の中心になるといつのを見ていただきたいと考えています。

小川 貴重なご意見ありがとうございます。今のご意見も

各地で聞くことがあります。6次産業化は農業に手が空いているからできる可能性がある。だけどガッツリ農業をやっていたら6次産業化なんて言っているヒマはない。ガッツリ農業のところだと男性のところでは情報が止まってしまって女性まで下りてこない。若い人たちは、地域では自分一人、お嫁さん自分一人で農業をやっているが、SNSなどを使って遠くの人たちと繋がり、情報交換している流れがあると思います。地域だけみると狭くなってしまうますが、今は遠くの人と繋がる方法がありますので、ぜひそういうものも活用していただきたいと思います。いいご意見をいただきました。どんどんJAの方に聞いてほしい。そう思っているということをJAでも掴んでほしいというご意見ですが、そこで私のような取材をし、研究者を者をごんごん使っていただきたい。

北海道については勉強不足な部分があつてまだ調査に入ることがありません。北海道は他の地域とは違う状況があると思います。これからは、調査や取材に入らせていただいて、今の状況を発信をしていきたいと思えます。私のような研究者にお声がけをいただいで使っていただきたいと思えます。

もうひとつ感想を述べます。女性からいくつかが意見をいただきましたが、この短い間でもいろいろなバネがあると思えました。いろいろな意見、すぐ発展的な意見を出してくださいました。そのバネを地域は逃してはいけないと思えます。もったいないですね、これを逃してしまつては。バネを次に活かすに

はどうしたらいいかということこそ是非地域全体で考えていっていただきたい。今日の感想です。ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。我々も五五〇万人の道民



と共にこののを一つのスローガンにしてありますが、五五〇万人の道民の半分は女性です。この方々が主体的に積極的にいろいろ関わっていくのが大事になると思います。最後に小川さんがおっしゃったように、北海道についてはこれから本格的に調査されるということで、こんなことをお願いできないか、こんな質問があるがどうかなどのお問い合わせ、あるいは講演などにお誘い頂ければ喜んで飛んで来て下さるとのことです。今後とも小川さんといろいろなお付き合いを積み重ねていきたいと思えます。ありがとうございます。

生乳共販体制の役割 第一回

「生乳販売に必須の農協共販」

北海道大学 大学院農学研究院基盤研究部門

農業経済学分野 講師

清水池 義治

一・農協共販による生乳の販売

多くの消費者にとって牛乳乳製品は毎日消費する馴染みの食品であるが、どのような過程を経て食卓まで届けられているのか、あまり馴染みがないかもしれない。本連載では、「生乳」（殺菌処理がされておらず、乳牛から搾られたままの状態の牛乳）の販売・流通のしくみとそれを支える制度を解説し、生乳共販体制が果たす役割を述べていきたい。

酪農家が生産した生乳は乳業メーカーに販売され、そこで牛乳乳製品に加工される。酪農家から乳業メーカーへの生乳の販売は、通常、農協による共同販売（農協共販）を通じて行われている。農協共販は、農業者が個別に販売した場合に生じる不

規制改革会議は、「指定生乳生産者団体制度の廃止」を提言し、その後、与党・農林水産省と調整の結果、政府は「廃止」という表現は削除したものの、「同制度の是非や補給金の交付対象の在り方を含めた抜本的改革」について秋までに検討し、結論を得るとしました。そこで、北大の清水池義治講師に生乳共販体制の役割について三回にわたり解説していただきます。

利益を減らすために、農業者が共同して行う取り組みである。酪農家と乳業メーカーが直に生乳を取引することは、零細な取引を除くとほとんどなく、酪農が盛んな欧米諸国でも農協共販を通じた販売が主流である。

農協共販を通じた生乳販売は、酪農家と乳業メーカー、そして消費者にとってメリットがある。

酪農家が、直に乳業メーカーに販売する場合を想定してみる。生乳価格（乳価）を決める際、その価格が適正かどうかを判断するためには、生乳や牛乳乳製品の製造費用、他の酪農家の販売価格、牛乳乳製品の消費動向といった情報が必要である。しかし、一般的に、大企業であることも多い乳業メーカーと比較して、個々の酪農家はこういった情報を十分に持っていない。

清水池 義 治 (しみずいけ よしはる) 氏



北海道大学大学院農学研究院基盤研究部門農業経済学分野 講師
 1979年生まれ、広島県出身
 2009年に北海道大学大学院農学院博士後期課程修了、博士（農学）
 2006年より雪印乳業(株)酪農総合研究所・非常勤研究員
 2009年より名寄市立大学保健福祉学部講師、2015年より准教授
 2016年より現職

主著に『増補版 生乳流通と乳業』デーリマン社（2015年1月刊行）。

一方、乳業メーカーはなるべく安い乳価で買おうとするので、酪農家にとって不利な条件で取引を求められるかもしれないが、情報が少ない以上酪農家は不利かどうかの判断もできない。また、生乳生産に日々追われている酪農家は、生乳販売に使える時間は限られている。時間がないうち、不利な条件を呑まざるを得なくなるかもしれない。農協共販で酪農家がまとまれば、農協が代表して取引を行うため、こういった問題は軽減される。

乳業メーカーとしても、農協共販は有益である。直取引だと大手メーカーほど多くの酪農家と多くの取引をこなさねばならないが、酪農家が共販でひとつにまとまっていた方が取引に関する手間と費用は小さくできる。取引や販売

に関する費用が小さくなれば、最終的な牛乳乳製品の販売価格も下げることができるわけで、これは消費者のメリットにもなる。

二 生乳販売における共販三原則の意味

農協共販は「共販三原則」にもとづいて行われる。三原則とは、①プール価格、②共同計算、③無条件販売委託である。以下では、生乳を例に、その意味を具体的に検討しよう。

① プール価格

プール価格（乳価）とは、農協が乳業メーカーに販売した際の乳価が用途などによって異なっていたとしても、農協が酪農家に支払う際は異なる乳価を平均化して支払うことである（注1）。

生乳は、同じ生乳であっても最終的にどの製品に加工されるかで乳価が異なる用途別乳価である。一見わかりづらいしくみだが、同じ牛乳乳製品でも製品種類によって売れ行きは異なるし、牛乳乳製品ごとの小売価格と生乳生産コストとのバランスの中で、用途によって乳価に差を付ける取引が行われてきた。具体的には、最も高い牛乳向けは生乳1kg一七円程度、逆に最も低いチーズ向けは七〇円程度、その中間の脱脂粉乳・バター等向けは七五円程度である（いずれも平成二八年度のホク

ン取引乳価)。

もし、プール乳価払いでないとすると、チーズ工場周辺の酪農家は低い乳価ばかりで売らざるを得ない一方、牛乳工場周辺の酪農家は高い乳価を受け取ることになり、どの地域にいるかによって有利不利が生じてしまう。しかし、プール乳価だと、全道一律の平均乳価で販売でき、北海道内の酪農家であれば同じ条件で生乳を販売できるのである。

② 共同計算

共同計算とは、共同販売に要するコスト(共販経費)を酪農家全体で負担し、個々の酪農家は平均費用を支払うことである。代表的な共販経費は、酪農家から乳業工場までの生乳輸送費である。実際にかかっている輸送費は、工場や生乳を本州に送る港に近い地域の酪農家であれば安く、工場や港から遠い地域の酪農家ほど高い。もし共同計算を行わないとすると、前者の酪農家は有利だが、後者の酪農家は不利になり、特定の地域では酪農経営を行いつらいということになってしまう。

また、販売前に行う生乳の品質(乳質)を検査する施設や、一時的に生乳を貯蔵しておくクーラーレーションといった施設は、全ての酪農家が個別に運営するのは難しいが、酪農家が費用を共同負担すれば、より多くの生乳を対象に効率的に運営できる。共同計算によって、生乳の安全性をさらに高められるのである。

③ 無条件販売委託

無条件販売委託とは、酪農家が農協に販売を委託する際に販売に特に条件を付けないことである。

無条件販売委託は、前述の①と②の前提条件である。つまり、酪農家が農協に販売委託をする際に、高く売れるからといって牛乳向けでしか売らないようにとか、負担する経費を抑えるために近くの工場にしか売らないように、といった注文を付けられないということである。プール価格と共同計算を実現するためには、無条件販売委託が必要になる。

以上、みたように、農協共販は、比較的有利な立場にある酪農家がそうではない酪農家を助け、全体として支え合うという協同組合精神にもとづく取り組みである。そのことによって、広い北海道内であっても、地域的にバランスよく酪農を発展させ、牛乳乳製品の原料となる生乳を安定して生産してこれたと言える。

次回は、こういった生乳の農協共販を制度的に支えてきた指定団体制度のしくみをみていくことにしよう。

(注1) 乳質のよい生乳を生産した酪農家にはより多くの代金が支払われるしくみがあり、完全に平均化された価格で支払われるわけではない。

マイフェイスライフ in 美幌町



ぼちぼち農場 荒木千夏

(あらかし ちなつ)

- ・昭和50年生まれ 大阪府大阪市出身
- ・2005年に脱サラし大阪から北海道へ移住し農業研修を経て2009年、美幌町で新規就農
- ・大阪時代からの友人・川野美香さんとともに・レタス・ブロッコリー・グリーンアスパラ・塩トマトなどの施設栽培を含め約8ha耕作
- ・趣味は、読書と美術館めぐりと37歳からはじめたピアノ
- ・平成27年度新規就農優良農業経営者優秀賞 受賞

納品書や領収書に「平成

二八年」と間違わず書くこ

とに慣れてきたのですが、

気がけば一年の半分を折り

返していて改めて時間が過

ぎるのが早いなと感じてい

ます。

今年の美幌町の春は、干

ばつ気味で風が強く農場で

も強風で農業資材が飛ばさ

れたりと風に翻弄された春

でした。

五月中旬から六月上旬に

かけてハウス内への定植作

業が慌しく始まりあつとい

う間に「essay」の締め切

り日。

頭の中にあるネタをゴン

ゴンと探して引っ張りだし

てきたエッセーを読んで頂

きクスリと笑ってもらえた

ら嬉しいです。

709

美幌町で研修する前に十勝の鹿追町で農業実習をしていた。

春から秋にかけ畑作農家さんで、秋から冬にかけ牛屋さんで実習をした。

私が実習に行っていた牛屋さんでは、

朝夕二回約一〇〇頭の牛の搾乳とそれ以外にも糞だしや寝床の掃除も行っていた。

それまで牛に接する機会もなくあれほど大きな動物を近くで見たり触ったりする機会もなかったもので、正直恐怖心で

いっぱいだった。

大きくて恐ろしいなと思いつながら作業

をしていると相手にも伝わるようで牛たちからかなりなめられた。糞付きの尻尾

で顔を叩かれたり、わざわざ近づいてきて

て鼻水を飛ばされたり、寄ってたかって

鼻先で押されたりと酷い目にあった。

毎日、作業しているなかで私と牛たち

との関係はいいものではなく、怖がっている私を牛が面白がって追いかけるとい

う最悪の状況が続いた。

そんなとき事件が起こった。

搾乳待ちの牛数頭が作業をしていた私を取り囲み興奮し出したのだ。最悪だ、絶対怪我すると思ったそのとき、一頭の牛がそのりそりと取り囲んでいた牛たちの向こう側から私の前に出てきて盾のようになつてくれた。

偶然、助けてくれたみたいになつたんだと思う、でも有難かつたので耳標を確認すると「709」と書かれていた。その日以降、709は作業している私の傍につき離れずいるようになり、搾乳待ちの牛がラスト数頭になる頃に709は搾乳を済ませ寝床に帰っていくように



なつた。

不思議だなと思いながらも私は709とともに仲良くなり仕事が終わると709の寝床に行き挨拶をして帰るようになった。

それから、牛屋さんでの最後の実習日、いつものように作業をしていたら、いつも搾乳の順番が最後の方だった709がその日に限って先頭きつてさっさと搾乳を終わらせ寝床に帰ってしまった。

私もそれを見ていた実習先の農家さんも驚いた。そして、その日の作業が全て終わったとき、農家さんが「搾乳の順番って習慣になつているからあんなことしないと思っただけど、709は何かわかつてたのかな」と言われ、きつともう私がここに来ないことをわかつてたんだと思い涙が溢れた。

● 光と影

印象派を代表する画家クロード・モネ。日本人でモネが好きな人は多い。例外なく私もモネの作品は好きだ。特

に、ロンドン国会議事堂、霧の中に差す陽光、は何とも言えない感傷的な気分させられ、はじめて本物を見たときにはその場から動けなくなるくらいその絵に引き込まれた。

光と影を使い雰囲気表現するなんて凄い絵だ。写真でも光と影を絶妙にとらえたものは美しいしこれは絵や写真に限ったことではないと思う。

人でも、裏にある努力だったり苦勞だったりがあるからこそ、ひかり輝いて見え心を動かされる。影なくして光は存在しないのだ。

小学生の頃、絵を描くことが大好きだったので、近所の絵画教室に通っていたことがあった。そして、小学校の裏庭にあるへちまを描いた絵がたまたま何かの賞をもらい展覧会に出品されることになった。

学校の教室で放課後一人残り、出品するから絵に手直しをしましょうと担任の先生に言われた。

目の前にへちまはなく、見えるのは大

きな黒板とすわりと並んだ机と誰も座っていない椅子だった。

「あの時描いたへチマはないのにとつやって手直しするの？」幼いながらに疑問を持ちながら苦戦し自分なりの着地点を見出せないまま先生に言われたとおり手直しをした。

それから、中学・高校と絵を描くことから離れてしまい大学に入ったときにもう一度描いてみようかと思ひ絵画教室に通いだした。ところが、デッサンで私は影を思うように表現することができずに挫折し絵を描くことをしなくなった。今はもつと描けなくなっていると思うけど、いつか美しい影をとらえてみたい。

● 相性

好きだからこそ距離感がつかめない。執拗にかまってしまう。その結果、嫌がられる。でも、気になって毎朝声をかけてまた、かまっつ。

嫌われたくないと思ひ焦って空回りの。もういらなうと言っているのに、心配し

て与えてしまう。何が駄目だったのかと考えるとまた近づいてじっくり覗き込む。

とつとつ嫌われたと思つて距離を置き、もう見ないようにしていたら気付くとそこには元氣だった頃の姿はない。

観葉植物との距離感というか手入れの仕方が全くつかめない。

作物の管理はできるのに、どうしてなのかしらと不思議で仕方がない。

お店の人にきちんと管理の仕方を聞いてきて忠実に守っている。今年に入って二人に嫌われてしまった。いや正確にいうと観葉植物が二つ枯れた。自宅に空いた鉢が二個並んでいるのを見ると切なくなる。

でも、次こそはとまた最近、物色し始めているけど、なんだか可愛そうなことしているな…。

● 天気予報

大阪で勤めていた頃、納期が迫ってへると休日なしで毎日終電で帰るといいう日々が続いた時期がよくある。

一日中パソコンの前で仕事をし、昼なのか夜なのかわからない。今日が寒いのか暑いのか、雨が降っているのか風が強いのかなんかも関係なく仕事をしていった。そういった情報が全く必要のない仕事だった。

大阪の夏は最高気温がどれくらい上がるのかも興味なかったし、ましてや水道凍結の心配が一切ない大阪で冬の最低気温がどれくらい下がるのかも知らない。

今は、毎日天気予報を確認している。一日四、五回は確認する。そして、風向きも気にして仕事を。とりわけ雨の予報は何時から何ミリ降るのかを確認し、空を見上げて雲の動きも見る。

時折、鳥の鳴き声に耳をかたむけ、カッコーが鳴けば傍にいる人に「豆を早く時期だね」と声をかけてみるけど、これは六月の定番セリフ。

集める情報の種類が全く変わったけど、共通していえることはインターネットによる情報収集だ。畑に居てもスマホをサッと出してインターネットに接続すれ

ばすぐに知りたい情報が手に入る。インターネットで表示される画面を見ていると一〇年以上前に居た職場のあの雰囲気を感じ出し今でも誰かがシステム開発をしていて天気なんか関係なく納期を気にして毎日頑張っているんだろうなと思う。そして、その誰かはまさかこんなに天気を気にして仕事をしている人がここにいるなんて知らないんだろう。

● 尊敬する人

尊敬している人がいる。

もう亡くなっているが、アップル社を設立したスティーブ・ジョブズさん。ジョブズさんが生前、スタンフォード大学の卒業式でスピーチをしたその内容にとても感銘を受けた。

『仕事は人生の一大事です。やりがいを感じる事ができるただ一つの方法は、すばらしい仕事だと心底思えることをやることです。そして偉大なことをやり抜くただ一つの道は、仕事を愛することです。』

『あなた方の時間は限られています。だから、本意でない人生を生きて時間を無駄にしないでください。ドグマにとらわれてはいけません。それは他人の考えに従って生きることと同じです。』

他人の考えに溺れるあまり、あなた方の内なる声がかき消されないように。そして何より大事なのは、自分の心と直感に従って勇気を持つことです。

あなた方の心や直感は、自分が本当は何をしたいのかも知っているはず。ほかのことは二の次で構わないのです。』

そして、スピーチの最後に『Stay Hungry. Stay Foolish.』と締め上げられている。

私は、この仕事が大好きだ。そして、この農場も大好きだ。

自分の居場所はこのなんだと思いつくしている。この農場で作った野菜を食べた人が笑顔になってくれたら何ものにも代えがたい喜びになり、心底素晴らしい仕事をしているんだと思える。

『ハングリーであれ。愚か者であれ。』私は、いつも昼前にはお腹グーグー鳴らしているし、あまりにつまらない冗談を言っている人達に失笑されるといふ愚かなこともしている。

ジョブズさんに突っ込まれそうだが、「君、そういう意味じゃないのよ…」



北海道農業の担い手育成と 農地の確保・有効活用に取り組む

公益財団法人北海道農業公社 担い手本部
(北海道農業担い手育成センター)

担い手本部長 加藤 和彦

一 設立と目的

公益財団法人北海道農業公社の担い手本部は前身の「社団法人北海道農業担い手育成センター」が、平成二二年四月に北海道農業公社と合併した際に、新規就農に必要な人と農地の業務を一体的に担当し、担い手の育成・確保をより円滑に推進するため、旧担い手育成センターの業務と公社の農地保有合理化事業部門を統合した部門として設立され、今日に至っています。

ご承知のとおり、北海道農業は、人口の減少、経営者の高齢化が進み、農業生産力のみならず集落機能や農村社会全体の活力の低下が懸念されており、豊富な土

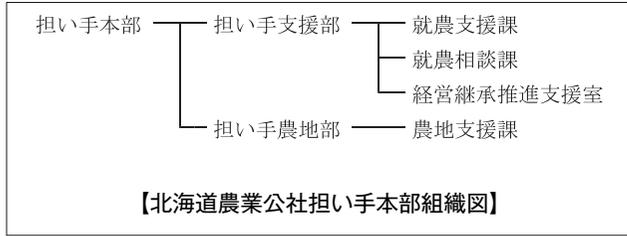
地資源など優れた農業生産基盤を有している北海道農業の持つ力を最大限に発揮し、活力ある農村社会を維持していくためには、担い手の確保・育成が重要な課題となっております。

一方で、食の安全や食料の安定的確保など農業の大切さや魅力を感じながら、自然とのふれあいやゆとりを重視する暮らしを志向して農業への参入を希望する方々も増えていきます。

このため、農家の後継者とともに、多様な参入希望者を地域に迎え入れて、地域や農業の担い手として育成するため、当公社は市町村やJAなど地域の皆さんと連携しながら、様々な就農支援策を実施しています。

また、担い手の育成には人の育成と同時に農地の確保や有効活用も重要なことから、農地保有合理化事業との連携を図り、優良農地の確保や担い手への集積を図っています。

二 組織体制



担い手支援部が、旧農業担い手育成センターの業務を引き継いで推進しているとともに、担い手農地部は農地保有合理化事業と農場リース事業（酪農リース事業）を担当しています。

三 事業の内容

担い手支援部では現在五つの事業を柱として担い手育成を推進し、担い手農地部では二つの事業を重点事業として推進

しています。

(一) 担い手支援部

① 就農促進支援活動

これからの地域農業を支える農業後継者や就農参入希望者などに対する就農相談活動や各種情報の提供、就農希望者の農家研修や農業体験の支援等を

地域担い手センター（市町村・JA等）と連携して推進。また、国際的感覚を備えた担い手育成のための農業青年の海外派遣研修を実施。

② 青年就農給付金事業（準備型）

就農に必要な宮農技術を習得するため、北海道が認める教育機関や先進農家等で研修を受ける研修生に給付金を給付。

③ 就農支援資金貸付事業

新規参入者や農家後継者の円滑な就農に向け就農計画に対応した無利子の資金貸付と既貸付金の適正な管理を実施。

④ 就農啓発基金事業

優れた農業経営を行っている新規参入者や農業後継者に対する表彰、就農研修の受入環境整備への助成、担い手育成や農業・農村の理解を醸成する活動を行う団体への支援、担い手育成確保に係る調



新農業人フェア（東京会場）

査研究を実施。

⑤ 農業技術研修員受入事業（委託）
国際交流促進のため、JICA（独立行政法人国際協力機構）が道内で行う発展途上国の農業指導者を養成する研修の支援を実施。

（二）担い手農地部

① 農地保有合理化等事業
農地中間管理機構として、離農・規模縮小農家等から農地を買い入れ、意欲ある多様な経営体に一定期間貸付後、売渡しを行い、規模拡大及び面的集積を促進。

② 公社営農場リース事業
離農農場（酪農）を買い入れて整備後、新規参入者に乳牛と一緒に一定期間貸付後、売り渡し、円滑な新規就農を促進。

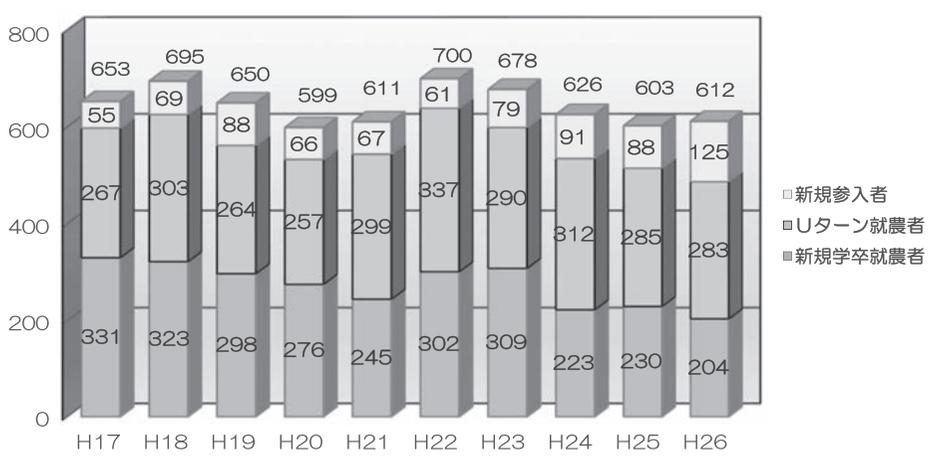
四．担い手育成確保の現状と課題

二〇一五年の農業センサスでは本道の

販売農家数は三八、〇〇〇戸となり、前回の二〇一〇年の四四、〇〇〇戸から約六、〇〇〇戸減少しました。年平均では約一、二〇〇戸が減少していることとなります。一方で道の調査によると道内の新規就農者はこの間六〇〇〜七〇〇人で推移しており、平成二六年では新規学卒就農者とUターン就農者といった農家後継者が四八七人、農外からの新規参入者が二二五人、併せて六一二人が新規に就農しています。

農家戸数が毎年減少を続けている中で、農家後継者の就農の上積みは難しいことから新規参入者の育成・確保がますます重要となっています。こうした中で二六年の新規参入者数は、道の調査が始まって以来最高の人数で、前年より三七人、四〇％も増加しており、一過性のものなのか、青年就農給付金等の施策の効果なのか、今後の動向が注目されます。

しかし、最近では雇用の求人倍率がかつてないほど高く、農業分野での人材の確



新規就農者数の推移（北海道）

保が難しくなっていることや各地域での就農体制の整備により、就農希望者をめぐる地域間の競争が激しくなっています。

このため、当公社としては、就農支援相談会の回数や参加する市町村のブースを拡大するほか、ホームページを閲覧する人が増えていることから、各種の就農支援情報や地域の情報、経営委議希望農場の情報、法人の求人情報など、ホームページを充実しながら、就農希望者の確保に努めています。

また、近年、経営者が離農する前に、就農希望者に経営を継承させる第三者経営継承が、資産の劣化を防ぎ、継承者の負担軽減や円滑な就農につながるということで、各地域で取組が活発になってきています。

当公社においても平成二六年度に経営継承を専門に担当する経営継承推進支援室を設置し、国の支援事業のほか、研修会やアドバイザーなど、第三者経営継承に取り組み地域に対する支援を重点的に

行っています。

こうした担い手育成をめぐる様々な課題がある中で、地域農業研究所には、円滑な新規就農に向けた課題の洗い出しや解決方法について、調査研究事業を通じて連携、協力をしていただいております。就農事例調査集の作成や土地利用型農業における新規就農対策に向けた提言などの成果を地域にフィードバックさせていただいております。

五・本年度の新たな取組について

本年度の新たな取組として道の委託を受けて、若手農業者と女性農業者を対象とした研修事業（新たな担い手確保・経営体質強化対策事業）を予定しています。

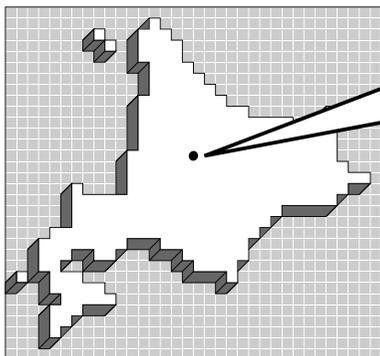
若手農業者については、いわば農業版MBA塾とも言うべき内容で、経営戦略やマーケティング能力、法人化の手法等を実習をまじえて企業経営者や専門家を



新規就農・農業体験セミナー

講師として年間二回程度の開催を、女性農業者については、加工や販売など六次産業化に向けた知識や技術を実習もまじえて専門家を講師として年間五回程度の開催をそれぞれ札幌市で予定しており、今後、具体的な研修プログラムを公表し、研修生を募集いたしますので、若手農業者や女性農業者の皆様の参加をお待ちしています。

連載 わがマチの自慢 No.10



比布町

— やすらぎと
夢があふれる
ふるさとをめざして —



村上山公園から望む比布町

比布町は上川盆地の北東に位置し、東南に雄大な大雪山連邦の山々がそびえる、自然に恵まれたマチである。旭川市との境界にあるカタクリの群生で知られる突哨山や東北側の北嶺山など総面積のおよそ半分が山林であるが、市街地を中心に平たんな地形がまとまっている。大雪山系を源とする石狩川が東南部を流れ、一帯は地味が豊かで水田が広がっており、内陸性の気候とも相まって、良質米の生産に適した地域である。

平成六年には道立上川農業試験場(当時)がこの地に移転。北海道が誇る良食味米「ゆめぴりか」はここで開発されており、比布町は「ひめぴりか」のふるさとでもある。



冬のスキー場【比布町提供】



遊湯びっぶの全景【比布町提供】



「グリーンパークびっぶ」パークゴルフ場【比布町提供】

1. スキーと いちごのまち

旭川市から北へ向かう国道四〇号線で比布町に入ると「スキーといちごのまち」の看板が目を引く。古くからスキー場といちご狩りを観光の目玉として、旭川や札幌、北見方面からの利用客の誘致と

マチのPRに取り組んできて
いる。

(1) スキー場とその周辺

びっぶスキー場は、市町村営のスキー場としては道内有数の規模を誇るスキー場である。

子供から大人まで幅広い世代が楽しめるスキー場として

親しまれ、平成五年には、リフト輸送人員で一九〇万人と二〇〇万人に迫るまでになった。スキー場の山頂につなが
る散策路や展望台も整備されており、パラグライダーの滑空場として利用されるなど、夏場にも多くの人が訪れている。

平成一一年には、スキー場に隣接して温泉宿泊施設「良

佳^かプラザ・遊湯びっぶ」を、

翌年には、パークゴルフ場を中心とする「グリーンパークびっぶ」をオープン、年間を通じた観光ゾーン「びっぶ良佳村」として歩みはじめた。

しかしながら、レジャーの多様化によりスキー離れが進み、周辺の市町村にも同様の施設が整備されるなどして来客者数が減少、メインのスキー場ではピーク時の四割程度になっている。

一方で、スキー場をはじめとした施設は町民の貴重な雇用の場でもある。平成二七年一〇月に町が策定した「比布町まち・ひと・しごと創生総合戦略」において、町内での雇用の場を確保するため、スキー場のリフト券利用者数や遊湯びっぶ来館者数を重要業績評価指標としており、人口減少が進む中、一定の利用者

数確保を目標に具体的な施策を実行していくこととしている。

スキー場では昨年北海道シーズンネット^⑤に加盟したほか、ファミリー層を主要なターゲットとして、親子での利用に有利なりフト券を販売するなど、集客の向上につとめている。また、今シーズンオープン前には、センターハウスを新築して、利用者の利便性を向上する考えである。

(注) 北海道シーズンネット…加盟スキー場のいずれかでシーズン券を購入すると、加入している他のスキー場リフト券を特別料金で購入できる。

(2) いちご狩り

いちご狩りは毎年六月下旬から七月上旬にかけて開園されており、多くの来園者で賑

わつ初夏の風物詩ともなっている。しかしながら、栽培農家の高齢化が進み、手間のかかるいちご栽培が敬遠された結果、ピーク時には五〇戸以上あった栽培農家が二〇戸を切る状況になっている。かつては二〇戸以上あったいちご狩り農園も今シーズンは八戸となり、まち全体のいちごの販売額もピーク時の約五分の一になった。こうした状況に町は危機感を抱き、いちご栽培を維持しようと、いちご苗購入費の支援や、今後のいちご狩りのあり方についての検討に取り組み始



泥んこバレー【比布町提供】

めている。
比布町の農業者の高齢化は全道平均を上回って進んでいる。コメやいちごなどの農業生産を維持していくためには、後継者や農外からの新規就農者の確保が最大の課題である。

(3) 泥んこだらけのバレー大会

休耕田を活用して町内外の多世代交流の場を提供し、スキーといちごのまち比布町を広くPRすることを目的として七月中旬に開催されている大会であり、今年で八回目とな

る。昨年から四五チームの出場者を募集しているが、それを超える応募があり、先着順の受け付けとなる。町外からは、友好交流提携都市の滋賀県湖南市からの参加のほか、道内では根室管内からの参加もあり、参加者や観客など延べ七〇〇人に達する一大イベントに成長してきた。

水田という条件だからこそ飛び出す、好プレーや珍プレーに観客からは大きな声援や拍手が寄せられ、笑いに満ちた大会となる。主催者の実行委員会は、世代間や町内外の交流に止まらず、比布町の魅力を発信できる大会としてさらなる発展をめざしている。

2. マチの顔 比布 駅がリニューアル

宗谷本線比布駅は、明治三一年、比布原野の開拓からわずか三年後に開業、鉄道とともに発展してきた市街地の盛衰を見守ってきたマチの顔である。昭和五〇年代半ばに、駅構内を舞台にした磁気ばんそつこのテレビコマーションがテレビ放映され、全国的に話題となったことで知られる。

国鉄の合理化対策で昭和五九年に無人駅化したのが、町内の方が乗車券販売の委託を受け、営業を続けていた。事務室を改造した喫茶コーナーも好評だった。平成二年にはこげ茶色だった外壁を特産のいちごをイメージしたピンク色に塗装し比布らしさを加える

など、多くの人に愛されてきたが、平成二三年以降は完全な無人駅となっていた。こつした中で、JR北海道からは、建物の老朽化に伴い、これまでの駅よりも大幅にコ



比布駅での特産品PR 【比布町提供】



比布駅スタンプ 【比布町提供】

ンパクトにした駅舎の建て替え計画が示された。町は比布駅が担ってきた役割や町民の駅に対する想い、また、駅前の商店街がシャッター通り化している状況を踏まえて、新たなマチの顔として新築することにした。

今年三月から待合室の利用が始まり、四月からは喫茶コーナーも開業。町内の観光や農産品のPRなど、町民の新たな交流や町内外への情報発信の場として、中心市街地に人の新たな流れをつくるマチの顔として生まれ変わっている。

3. 「たまごかけごはんセット」の誕生

今年の春に商工会の青年部が中心になって開発した特産品が好評だとのこと。

地元養鶏場のブランド卵「かつばの健卵」、地元稲作農家が栽培した「ゆめぴりか」、地元の特産農産物で、二年かけて育て上げられた小ねぎ「旬の彩り。」を使った「びっぶ小ねぎ醤油」をセットにした「北海道比布町のとつておき濃厚たまごかけごはんセット」だ。たまごかけごはんセットは全国にも数あるが、ここまで地元産にこだわったセットは全国的にも珍しいとのこと。

このセットの開発には、町教育委員会が主催した「まちづくりリーダー育成プロジェクト事業」が大きな役割を果たした。自分たちのまちは、自分たちでつくるという意識を高め、将来まちづくりの主役として活躍する人材の育成を目的とした事業である。このプロジェクトに集まっ



TKGセット【比布町提供】

た飲食店や農業の経営者など、商工会青年部のメンバーは、旭川大学の先生を招き企業戦略や市場開拓、経営理念などの勉強会を重ねたり、マチの産業の状況や人口の見通しなどを自ら調べ、分析した。こうした勉強会を経て、メンバーはマチにはこれといった特産品がない、マチを代表する農産物を使って新たな特産

品づくりにチャレンジしよう」と動き出し、三年をかけて完成したのである。開発に当たってメン

バーは、素材のままが一番おいしいと感じる農産物が多い中で、今ある商品を組み合わせ、新たな価値を生み出す商品をつくる方法もあることを学び、素材の特徴を活かした組み合わせとして「たまごかけごはんセット」に行きついたとのこと。

一番の課題となった醤油については、旭川市にある醤油メーカーに相談し、地元の農産物を使った醤油を開発しよう」と試作を繰り返し、最終的に「旬の彩り。」を混ぜ込んだ醤油「ぴっぴ小ねぎ醤油」が昨年完成した。

また、販売に当たっても、消費者にこの商品の特徴が伝

わるようなネーミングにこだわり、キャラクターも、町内の小中学生から募集し、選ばれた作品を基にデザインした。こうして今春販売されたたまごかけごはんセットは一カ月ほどで五〇〇セットを売り切ることができたという。これからも町民全体で応援し育てていくことが必要だ。

比布町ではこれまで日本酒やワイン、まんじゅうなど数々の特産品を作ってきたが、やがて消えていった。役場が主導して開発したものの、町民には定着しなかったのだ。たとえ時間がかかっても、こうした町民の手による商品開発の動きが広がり、マチに根付く特産品となる。特産品づくりに向けた新たな動きとして注目される。

4. 夢をかなえるプロジェクト

比布町には子供たちの夢をかなえるプロジェクトがある。中学生を対象に行っている「君の夢プロジェクト」だ。心の豊かさを育むため、生徒が夢や希望を膨らませ、将来の生き方や進路を選択する能力を育成することをめざしている。

生徒たちは、実業団のトップ選手やプロの演奏家から直接部活動の指導を受けたり、プロ野球の試合を観戦したり、また、スキージャンプ界のレジェンド葛西紀明選手の講演を聞いたりしている。こうした機会を通じて一流選手の迫力に圧倒されたり、基本的な技術を確認したり、基礎的な練習の大切さを学んでいる。

近年は、首都圏への修学旅行を行い、自分たちで決めた研修先などを見学し、これまでに触れる機会がなかった歴史や文化・芸術などを体感している。

小さなマチに住みながらも得られる貴重な体験。生徒たちはこうした機会を提供してくれたふるさとを誇りに思うとともに、夢に向かってチャレンジしていくことの大切さを学んでいるに違いない。

5. 動画でマチの魅力をPR

比布町は豊かな自然があり、子育てに対する支援も充実している。スキー場やいちご狩りなどの観光資源もあるのに、近隣の市町村に比べ、情報発信が弱いのではないかと指摘が町民からも寄せられて

いた。そうした反省から、町では、マチをPRする動画「ぴっぴなんだもん！」を作成し、平成二十七年四月から町のホームページやYouTube、フェイスブックに配信している。この動画が好評のこと。

この番組では、地元飲食店の定番料理を紹介する「ぴっぴのグルメ」と番組の終盤にまちをPRする「課長シリーズ」からなる。「ぴっぴのグルメ」は、料理ばかりではなく、比布の街並みや自然などさりげないマチの日常も紹介している。また、取材の対象となった飲食店の関係者や町民も出演し、マチのPRに役割を担っている。

この番組の作成には、役場の職員が大きく関わっており、飲食店への交渉からシナリオの作成、番組の主役までを

担っている。この動画は、マチの魅力を町内外に広く発信しているほか、何より、町民自身があらためてマチの良さに気づき、誇りを取り戻す機会を提供しているのではないかと思う。

動画撮影の様子【比布町提供】



〈取材後記〉

役場での取材を終え、比布駅のピピカフェへ立ち寄った。動画「ぴっぴなんだもん！」

にも紹介されている地元の米粉を使ったハートtoastを食べていると、一両編成の列車が到着した。駅舎は新しくなったが、構内は従来のままだ。

駅前の商店街を歩いてみた。古くて傷んでいる建物や閉ざされた商店が並んでいるのを見ると、この町のおかれている厳しい状況を感じざるを得ない。とはいえ、旭川市とのほどよい距離、豊かな自然や静かな環境、美しく広がる水田、そして取材で伺った奮闘する青年たち、このマチは確かに素晴らしい魅力を持っている。

（比布町には、資料や写真の提供、原稿の監修など多くの協力をいただきました。）

一般社団法人 北海道地域農業研究所
特別研究員 三津橋 真一



研究会・研修会等への
報告者・講師の派遣
(平成28年4月～6月)

- 「平成28年度食の自給ネット
ワーク総会」
主催 北海道食のネットワーク
とき 平成28年4月9日
テーマ 大筋合意以降のTPP
講演 太田原 高昭
(当研究所・顧問)
- 「北大農学部農業経済学科移行
生に対する講義」
主催 北海道大学農学部農業
経済学科
とき 平成28年4月14日
テーマ 北大農学部の移行生の
皆さんに伝えたい T

- PP・農協改革・北海
道農業のこと
講演 入江 千晴
(当研究所・常務理事)
- 「平成28年度生協九条の会
総会」
主催 北海道生協九条の会
とき 平成28年4月18日
テーマ TPPはこれからでも
止められる
講演 太田原 高昭
(当研究所・顧問)
- 「中央アジア地域農民組織
化」コース」
主催 JICA北海道セン
ター
とき 平成28年5月12日
テーマ 日本の農業政策
講演 飯澤 理一郎
(当研究所・所長)
- 「中央アジア地域農民組織化
コース」
主催 JICA北海道セン
ター

- とき 平成28年5月18日
テーマ 北海道における農産物
の流通の仕組み
講演 飯澤 理一郎
(当研究所・所長)
- 「組合員学習会」
主催 生活協同組合コープ
さつぽろ
とき 平成28年5月20日
テーマ TPPの影響は甚大
農業そして私たちの暮
らしは？
講演 飯澤 理一郎
(当研究所・所長)
- 「農業協同組合研究大会」
主催 農業協同組合協会
とき 平成28年5月28日
テーマ 農協合併のこれまでと
これから
講演 太田原 高昭
(当研究所・顧問)
- 「平成28年営農企画能力開発研
修」
主催 一般財団法人北海道農

- 業協同組合学校
とき 平成28年6月1日
テーマ 地域農業マネージメン
ト推進のポイント
講演 黒澤 不二男
(当研究所・顧問)
- 「第一〇九回村づくり・人づく
り報徳研修会」
主催 一般財団法人北海道報
徳社
とき 平成28年6月3日
テーマ 北海道の農漁協組合運
動
講演 太田原 高昭
(当研究所・顧問)
- 「JA教育文化活動推進大会」
主催 JA加美よつば
(宮城県)
とき 平成28年6月4日
テーマ 農協運動における教育
文化活動の意義
講演 太田原 高昭
(当研究所・顧問)

○「第44回全道結婚相談研究協議会」北海道地域元気づくり応援フォーラム」

主催 特定非営利活動法人

北海道マリッジ・カウ

ンセリングセンター

とき 平成28年6月22日

テーマ 「結婚への途」〜あと

一歩ふみだすために〜

講演 黒澤 不二男

(当研究所・顧問)

人事異動

△退任▽

専務理事 大坂 雅博 (5月26日)

特別顧問 竹林 孝 (6月22日)

*公益財団法人 北海道農業公社 理事長に就任

△新任▽

専務理事 伊藤 則明 (5月26日)

平成28年5月26日開催の通常総会及び理事会にて、
下記のとおり、監事の任期満了による改選と一部理事の
退任による改選が行われ就任いたしました。

理事長	内田和幸
副理事長	板谷重徳
副理事長・研究所長	飯澤理一郎
専務理事	伊藤則明 (新任)
常務理事	入江千晴
理事	坂下明彦
理事	谷本一志
理事	佐藤彰彰
理事	西一司
理事	箱石文祥
理事	北良治彦
理事	大野稔二
理事	麻田信之 (新任)
理事	武田英之 (新任)
理事	瀧重之 (新任)
理事	木下純宏 (新任)
代表監事	佐々木環 (再任)
監事	鈴木雅博 (再任)

◆ 編集後記 ◆

●平成二八年度の農業総合研修会は女性力をテーマに開催した。「儲けを優先しない女性の暮らし目線で地域の棚卸しをしよう」「女性の活動は、地域の『ハネ』となり『接着剤』となり、地域を巻き込む竜巻に成長して、みんなを元気にする」。そして、定年を機に家にももる男性諸氏を元気づけ奉仕活動に立ち上がらせた例もあるそうで、これを男女共同参画ならぬ女男共同参画と言つそつだ。厳しい時こそ「女性力」に注目だ。

●熊本・大分地震。農学部に通う大学生や集落の世話役など、「よか人」たちの人生が奪われた。被災地が一日も早く心からの笑顔を取り戻せるように、連鎖地震には連鎖支援で対応だと言わんばかりに、支援は続く。

●G7環境相会合で『富山物質循環枠組み』を採択。処分することになる食べ残り食品を減らすため、食品の持ち帰りや代替エネルギーとしての利用などを加速させるといふ。

日本生まれの世界共通語「もったいない」の

DATA FILE

関連事項 / DATA

一般社団法人 JC総研
〒162-0826
東京都新宿区市谷船河原町11番地
飯田橋レインボービル5階
☎ 03 (6280) 7200 (代)
Fax 03 (3268) 8761

公益財団法人 北海道農業公社
〒060-0005
札幌市中央区北5条西6丁目
農地開発センター内
☎ 011 (241) 7551
Fax 011 (271) 3776

比布町役場
〒078-0392
上川郡比布町北町1丁目2番1号
☎ 0166 (85) 2111
Fax 0166 (85) 2389
HP : <http://www.town.pippu.hokkaido.jp>

一般社団法人 北海道地域農業研究所
〒060-0806
札幌市北区北6条西1丁目4番地2
ファーストプラザビル7階
☎ 011 (757) 0022
Fax 011 (757) 3111
HP : <http://www.chiikinouken.or.jp>
E-mail : office47@chiikinouken.or.jp

気持ちを広めたい。

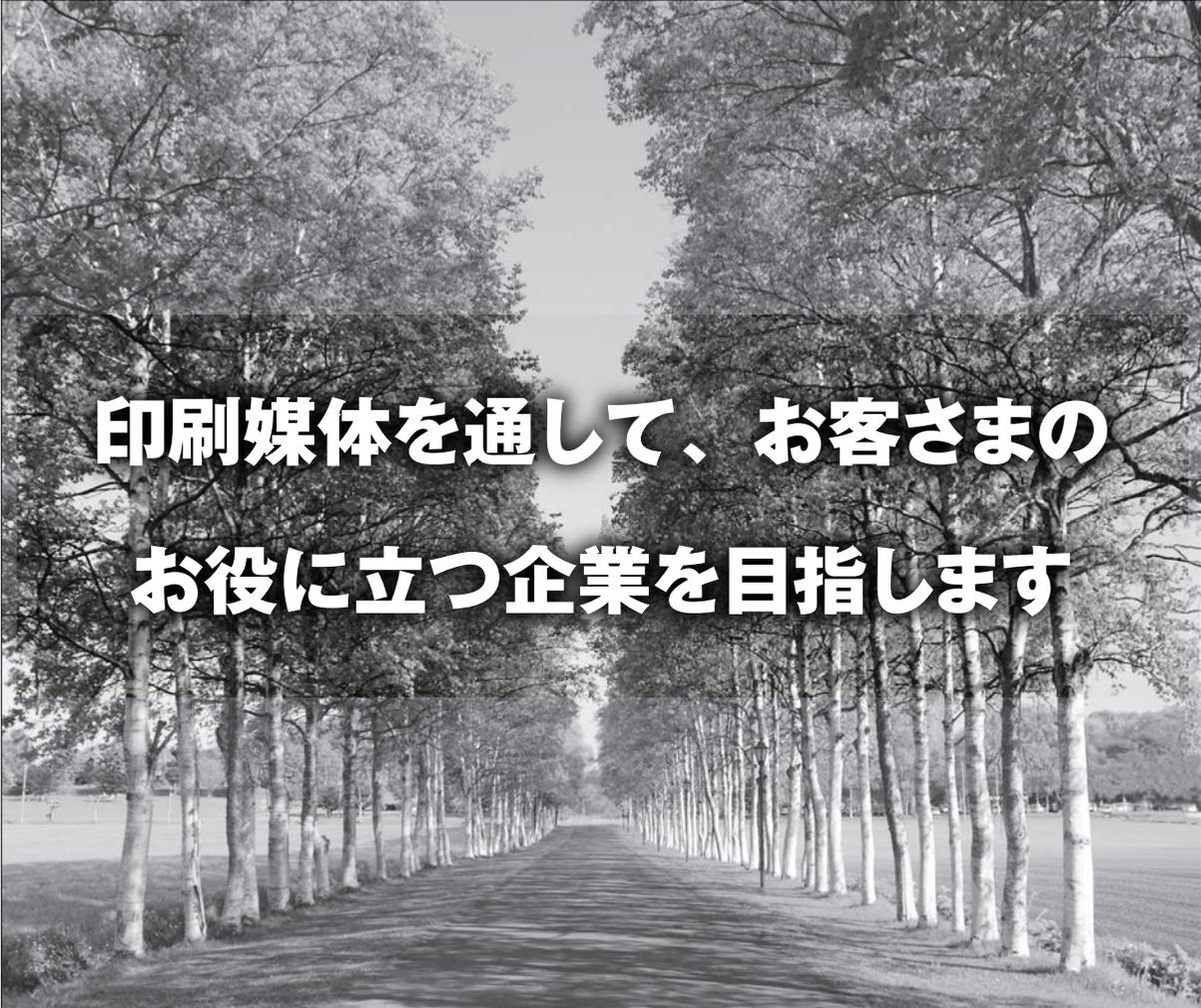
●伊勢志摩サミットで来日した米国大統領が被爆地を訪問。「核で人類は滅亡する。救えるのは人類の英知のみ」とアインシュタインらが訴えてから六一年目。核兵器は二度と使われてはならない。

●年金積立金管理運用独立行政法人の二〇一五年度運用損益が五兆円超の赤字に。老後の生活がいつの間にか株式市況任せになってい

たなんて…。しかもサミットでは世界経済の下方リスクが共有されたばかり。ほかに道は無いのか？

●囲碁の井山裕太棋士が全七冠タイトルを独占。史上初の歴史的快挙。恩師いわく。「自信過剰の人はミスを引きずるが、謙虚な井山さんはミスを忘れられる」。強さの秘密は謙虚さと気分転換にあり。

(入江 千晴)



印刷媒体を通して、お客さまの お役に立つ企業を目指します

デザインから印刷・製本まで
一貫した社内体制で、
それぞれのニーズにお応えします

 **富士プリント株式会社**

本 社

〒064-0916 札幌市中央区南16条西9丁目

TEL (011)531-4711 FAX (011)530-2549

URL : <http://www.fujiprint.co.jp/>

東京支店

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-20 山田ラインビル2 4階

TEL (03)3261-2613 FAX (03)5211-8235





北海道米LOVE x GREEEN
CM公開中!
 北海道米CMソング
 GReeeeN
 「メシ I GOT IT ↑↑」
www.hokkaido-kome.gr.jp
 北海道米 **LOVE**

ごはんは、
 おなかを満たすもの。
 でも、それだけじゃありません。
 みんなそろって楽しく過ごすとき。
 日本人で良かったと思うとき。
 お母さんのお弁当を残さず食べるとき。
 そのまんなかにあるごはんは、
 おいしいだけじゃない。
 そこにある気持ちこそが、嬉しかったりする。
 なにげないけれど、
 かけがえのない存在だと思う。



**大切な毎日を
 ささえるもの。**



た
 べ
 よ
 う
 北海道米
 GREEEN
 LOVE

北海道米 | ゆめぴりか ふっくらりんご おほろつき ななつほし
 ほしのゆめ きたくりん
 もち米 | はくちょうもち 風の子もち きたゆきもち きたふくもち
 北海道米販売拡大委員会 北海道米食率向上戦略会議